西都市・埋蔵文化財発掘調査報告書

第　2　集

囲　横　穴　墓

元地原地下式墳墓群

1987・3

宮崎県西都市教育委員会

序

西都市の平野部に所在します丘陵地は、大小の別なく古代遺跡の多くを埋蔵すると周知されています。

また、これまでに調査発見されました遺跡からは、貴重な出土遺物も多く郷土の古代史解明にも大きく貢献しています。

このたび発刊しました本報告書は、近代化農業経営をめざした農家の共同柑橘地造成、並びに県営綾川総合開発の畑地改良事業によって発見された遺跡の調査記録を報告するものであります。

本書が、今後の古代文化研究に資しますならば、まことに望外の喜びとするところであります。

なお、終始調査にご尽力賜わりました日高正晴氏には深甚の謝意を申し述べ、ご協力いただきました地域住民の方、県教育委員会等関係各位、さらには、当時の県立妻高等学校郷土史クラブ会員の皆様方へ深く感謝の意を表します。

昭和62年３月30日

西都市教育長　篠　原　利　信

目　　次

1　序　　説 …… 1

2　囲横穴墓発掘調査報告 …… 7

　1．発掘調査の経過 …… 9

　2．位置と歴史的環境 …… 10

　3．内部構造 …… 10

　4．出土遺物 …… 12

　5．まとめ …… 19

3　元地原地下式墳墓群発掘調査報告 …… 31

　Ⅰ　発掘調査の経過 …… 33

　Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 34

　Ⅲ　発掘調査の結果 …… 36

　　1．地下式第1号墳 …… 36

　　2．地下式第2号墳 …… 38

　　3．地下式第3号墳 …… 39

　　4．地下式第4号墳 …… 41

　　5．地下式第5号墳 …… 41

　　6．地下式第6号墳 …… 45

　　7．地下式第7号墳 …… 46

　Ⅳ　まとめ …… 61

序　　説

宮崎県のほぼ中央部に位置する西都市平野、その北方端に九州山地から張り出した丘陵地が続き、一ツ瀬川の支流にあたる瀬江川流域の狭小平野を湾入させ、東方に茶臼原台地が広がっている。

この台地は日向灘近くまで延びているが、南に向っては西都平野を潤す一ツ瀬川と平行し、通称新田原古墳群 220 基程が点在する祇園原まで延び、古墳群の東方には、航空自衛隊新田原基地も所在する広域な台地となって広がる。

また、茶臼原台地の西方からは、一ツ瀬川流域の西都平野をその間に置き、特別史跡西都原古墳群の 309 基が所在する台地を望むことができる。

さらに、この台地上と周域には各所に古代遺跡が散見されるが、中心となるのは茶臼原古墳群中、全長 110 m の児屋根塚古墳である。

近年、この台地上から貴重な遺跡が次々と発見された、それは昭和58年12月、一ツ瀬川総合開発事業によるもので、配水管埋設工事に先駆けて実施した事前調査により、最初に円形周溝墓が発見された。

この墓制も、県内ではすでに川南町で発見例があるが、通説的な周溝基にはマウンドが伴わないとされていた。

しかし、茶臼原の台地上から発見されたこの墓制には、緩やかな雑木林の傾斜面に位置した事から、わずかなマウンドが壊されないまゝ残されたと推測され、高さ約 1.5 m 程の土盛りが確認されている。

この周溝基の西側に、周溝が切合して発見されたのが、弥生時代の末期から古墳時代初期のものと推定される墳丘墓の発見で、この地方における古墳文化発生過程等の解明にも貴重な遺跡となっている。

円形周溝基・墳丘墓と連続して発見された地域は、国指定史跡茶臼原古墳群の半数程が所在する上野地域で、台地の縁辺部に位置する事から、眼下には天領穂北の 8,000 石と称された、西都平野の中の穂北平野を見下ろし、西都原古墳群の丘陵地も眺望することができる。

茶臼原古墳群は、前方後円墳の 3 基を含む総数55基の群集墳であるが、代表する古墳は前記の児屋根塚古墳である。

児屋根塚の後円墳丘上には、第 2 次大戦中に工作された坑が深く掘り下げられていた。その規模は、長軸1.81 m・短軸1.21 m幅の広さで、地下4.32 m掘り下げ、さらに低部から西方

へ長さ5.25m・幅0.60m・高さ1.95mの坑が延び、奥方からまた南へ8.13mも延びた、軍事施設を思わせる掘坑であった。

その位置が、古墳の最も重要な位置の中心部であった事から、誰もが主体部の大半は欠損したと見なしていた。

西都市教育委員会は、昭和60年5月、文化庁の許可を得て埋め戻しの復原工事を行った。

復原作業は、掘坑の実測から着手したが、竪坑東壁には、表面から1.5m程下った個所に厚15cm・長25cm程のわずかに突出した、主体部の粘土槨残部と思われる一部が確認されていた。

この粘土槨残片を研究資料として取りはずしたところ、銅鏡・蛇行剣等が露出した。これらの遺物は、第2次大戦中の坑工作時、わずかな差で難を免れたものである。

出土した銅鏡はまた、細い割れ目の線が確認されるが、ほぼ完全な形で発見され調査の結果、青竜・白虎等の文様、さらには24文字の浮彫りされた舶載鏡の四獣鏡であることが判明している。

茶臼原台地の南・西方には、幾条もの小丘陵が平野部に向って延びているが、南方西方と、その向が変化する地域の谷間には溜池が構築されている。

この千畑溜池の北西傾斜地に、8基の横穴墓が早期に開口し確認されていた。そしてその中には、横穴墓の今後の研究に必要とする貴重な資料を多く提供している。

特に千畑仮1号墓は、内部構造に特殊性があり、寄せ棟造りの玄室であるが、四隅は直線的な方角でなく丸柱を形取り柱の半分程が浮き出た形容を示し、約1m程の高さの完全な家の柱としたもので、最も特徴とすべき墓制という事ができる。

また構造についても、玄室の床部が縦横約3.5mの方形をなし、中央部天井の高さが2.1m、さらに天井部には棟木の線刻が認められ、棟木の線刻からは四隅に下り棟の線刻が直線に下りて、柱の上部からも横線の地廻り線刻等とつながり、詳細な家の様相が施こされている。

築造年代は、須恵器片の出土によって6世紀末から7世紀初頭の、いわゆる古墳時代後期と推定されている。

また千畑横穴墓の8基は、早期に開口したことから遺物等も持ち出されているが、内部には20cmから30cm、深いもので50cm～1mと、かなりの土量が流入していた。

西都市教育委員会は、昭和59年度から開口横穴墓の風化に先立ち、内部構造等の実測調査を行っているが、土砂の流入によって遺物も盗難を免れたものがあった。

残された遺物の中には、仮8号墓等からの円頭・環頭大刀柄頭や、これまで4世紀当時の

高塚墳から出土例のある「方格規矩文鏡」も発見されている。

この方格規矩鏡が、例外として２～３世紀も遅れて構築された横穴墓から出土したことは極めて珍しいことであり、今後は、さらに横穴墓の研究が飛躍する為の貴重な資料となるであろう。

千畑横穴墓群から西方凡そ100ｍの位置には、谷間に入り込んだ迫田を狭んで、昭和９年国指定史跡となった千畑古墳が所在する。

千畑古墳は横穴式の石室を有し、その規模は西都原古墳群中鬼の窟古墳の石室をしのぐものである。

またこの古墳は、自然の丘陵地を活用して築造されるが、石室の構造は切石を横積みにし、天井部には巨大な板石が使われ、県内では最大規模を誇る石室と言う事ができる。

そして地形上からか近年までは、山地斜面に構築された横穴古墳と見なされていたが、墳丘上から観察するとき、自然の山丘を前方後円形式に造形したと推測する事ができる。

石室の構造は、（すべて中心点・低部実測）羨道の長さ3.7ｍ、幅1.7ｍ、高さ1.5ｍ。玄室は奥行5.05ｍ、幅2.65ｍ、高さ2.8ｍあり、江戸時代の文化・文政期に開口したとあるが、副葬品については全く皆無である。

この千畑を中心とする瀬江川流域には、杉尾に３基、松船１基、千畑８基、囲１基、上江21基、野竹８基、堂園６基、大木原１基、串木４基と、総数53基の横穴墓が集中して所在する。

この横穴墓群の中の、囲横穴墓の発掘調査記録を本書は報告するものであるが、その位置は前記有石室千畑古墳の北西350ｍにあり、瀬江川流域から茶臼原台地に上る坂道の横に位置する。

その内容等は後記の報告書に詳細するが、以上の如く一ツ瀬川の支流にあたる瀬江川流域は、早期時代に開かれた地域であり、上穂北古墳群のほか、今後も諸事情により貴重な遺跡が発見される事は十分考慮される地域である。

本報告書は前記に触れている如く、囲横穴墓の発掘調査記録を報告すると同時に、元地原地下式墳墓群の発掘調査記録も合せて報告するものである。

元地原は西都市大字上三財の小字名であるが、調査地は、当時畦畔の複雑な畑地であり、土地改良事業実施後は整然とした畦畔により、水田・畑地の共用農耕地となっている。

元地原の所在する三財地区は、西都市域の南西部に位置し、この地域は九州山地から張り出して薩摩原に続き、六野原・長園原等と東方の佐土原町まで延びているが、六野原・薩摩原は隣接国富町との境界地域でもある。

元地原地下式墳の所在する地域は、通称薩摩原に含まれるが、その北方には三財平野を狭んで小豆野原の台地が東方に延び、三財地区の東端附近で終り、水田を隔てて中世の山城・都於郡城跡の威容を眺望する事ができる。

この平行する両台地間に開かれた三財平野は、凡そ400町歩の水田が早期から良質の米を産出し、両台地上もまた早くから開かれ、小豆・大豆等の穀類を多く産出し三財地域の農業経営を潤してきた。

三財平野を流れる三財川は、九州山地内に位置する寒川で、北川と南川とがY字型に合流し、三財川となって平野部に流れ出している。

三財川はまた、平野部に流出した地域で、さらに小河川の百井・田野川等が流れ込み、三財平野の南端を東方に向い、東端都於郡台地の山麓から大きく曲って北方に向きを変え、やがて三納川と一ツ瀬川とに合流している。

小豆野原洪積層台地には、柄鏡式の古式古墳を含む前方後円墳6基、円形墳67基、横穴墓3基、総数76基の三財古墳群が、主に東部及び南東部の縁辺部に所在するが、群集から1基だけ孤立した国指定方形墳の常心塚古墳も見受けられる。

また、元地原所在の薩摩原から連続した陵線の、その東方に位置する六野原からは、昭和17年当時、飛行場建設に伴って11基の高塚墳が滅失し、さらに地下式墳29基も確認され、ともに宮崎県が発掘調査を実施している。

この地域には、相当数の地下式墳が所在すると推定されるが、第2次大戦終了後飛行場用地が農地に開放された後も、時折、南九州特有の地下式墳は発見されている。

薩摩原と六野原の中間に、中ケ原の小畑地域がある。この地域は標高凡そ110m程であるが、中世紀には領主・築城者等も不詳の山城が経営された地域であり、古代遺跡としては、縄文土器片19点、弥生土器片185点、土師器片15点、須恵器片1点と、昭和60年度に表面採取した遺物があり、地形的にも古代遺跡の包蔵される可能性は極めて高い地域である。

九州山地から張り出した、この丘陵台地のクビレ部に位置する元地原については、後記報告書に環境等まで詳細に報告する事から省略したい。

最後に、西都市大字穂北の囲横穴墓調査時に、ご協力いただいた地域住民や関係者、さらには泥んことなった妻高校郷土史クラブ員と指導者の旭吉法耿先生、また元地原の発掘調査でご協力をいただいた、県社会教育課の加藤成夫先生、西都原資料館の茂山護先生、元地原地域住民の方や関係者等に、あらためて本書を通じて御礼を申し上げる次第であります。

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第２集発刊の関係者は次のとおりである。

西都市教育委員会

前教育長	横山人見	７月23日まで
現教育長	篠原利信	８月２日以後
社会教育課長	三輪公洋	
西都原古墳研究所長	日高正晴	
同　主事	緒方吉信	兼文化担当補佐
同　主事	蓑方政幾	兼文化係

囲横穴墓発掘調査報告

例　　言

1.　本書は、昭和41年４月１日から４日までに西都市教育委員会が実施した、囲横穴墓に関する発掘調査報告書である。

2.　調査関係者は次のとおりである。

調査主体・西都市教育委員会

教　育　長　　深美義秋

社会教育課長　　長友義美

社会教育係長　　岡田　留

文化財係長　　緒方龍弥

社会教育係　　浜砂一郎

公民館係　　緒方吉信（兼市立博物館管理）

調査員

県文化財専門委員　　日高正晴

調査担当者　　緒方龍弥

同　上　　緒方吉信

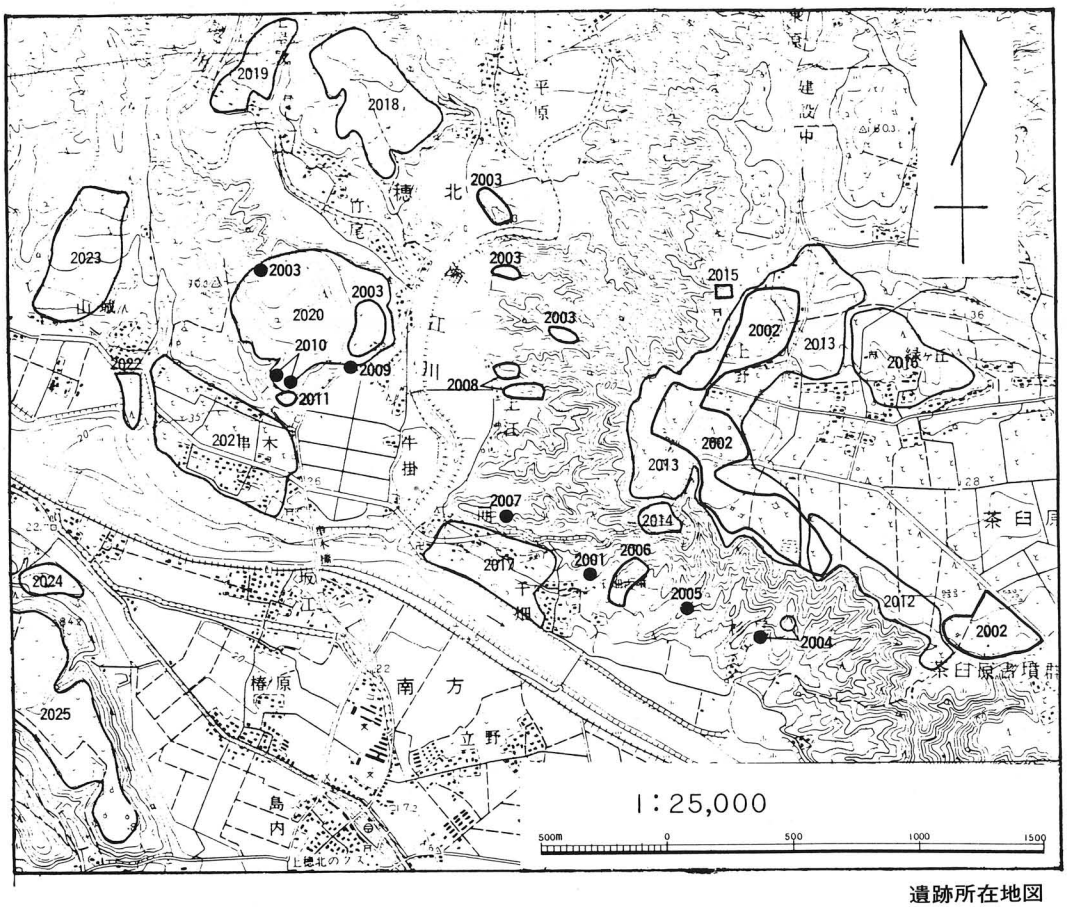
調査協力者　　妻高等学校郷土史クラブ員

（代表者　旭吉法耿教諭）

3.　本調査による出土遺物は、市立博物館の閉館に伴い現在西都市歴史民俗資料館に保存し展示される。

4.　発掘調査は、日高正晴・緒方龍弥・緒方吉信が担当し、県立妻高等学校郷土史クラブ員の協力によって実施した。

5.　本稿の執筆は西都原古墳研究所が行ない、日高正晴・緒方吉信・蓑方政幾が担当した。編集等は緒方吉信が行った。



遺跡所在地図

上穂北地区の遺跡

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代
2001	千畑古墳	大字穂北字桜田4787	古墳	古墳
2002	茶臼原古墳群	大字穂北・茶臼原	古墳	古墳
2003	上穂北村古墳群	大字穂北・南方	円墳 横穴墓	古墳
2004	杉尾横穴墓	大字穂北字杉尾	横穴墓	古墳
2005	松船横穴墓	大字穂北字松船	横穴墓	古墳
2006	千畑横穴墓群	大字穂北字谷ノ前	横穴墓	古墳
2007	囲横穴墓	大字穂北字囲	横穴墓	古墳
2008	上江横穴墓群	大字穂北字上江	横穴墓	古墳
2009	大木原横穴墓	大字穂北字大木原	横穴墓	古墳
2010	大木原古墳	大字穂北字大木原	円墳	古墳
2011	串木横穴墓群	大字穂北字大木原	横穴墓	古墳
2012	轟遺跡	大字茶臼原字轟	散布地	縄文～古墳
2013	上野遺跡	大字穂北字上野	散布地	弥生～江戸
2014	穂北城跡	大字穂北字上野	城跡	～安土桃山
2015	竹尾寺跡	大字穂北字上野	寺跡	江戸
2016	緑ケ丘遺跡	大字茶臼原字緑ケ丘	散布地	縄文～弥生
2017	千畑遺跡	大字穂北字千畑・囲	散布地	弥生～江戸
2018	牧ノ原遺跡	大字穂北字牧ノ原	散布地	縄文～古墳
2019	上ノ原遺跡	大字穂北字上ノ原	散布地	縄文～室町
2020	大木原遺跡	大字穂北字大木原	散布地	縄文～平安
2021	串木遺跡	大字穂北字串木	散布地	縄文～江戸
2022	山城城跡	大字穂北字平城	城跡	中世
2023	平城遺跡	大字穂北字平城	散布地	縄文～古墳
2024	金剛寺遺跡	大字南方字古川	散布地	縄文～古墳
2025	宝財原遺跡	大字南方 字宝財原・下原	散布地	縄文～古墳

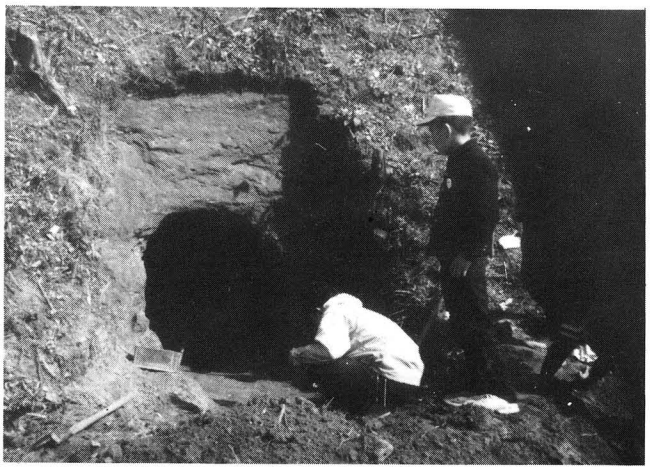
囲　横　穴　墓

1.　発掘調査の経過

西都市穂北の囲地区において、昭和41年３月31日共同密柑畑造成中、丘陵傾斜面が突然開口したと、市教育委員会に連絡があったので文化財担当者の緒方龍弥氏と筆者と２人で現地調査を行った。

その結果、大型の横穴墓であることが判明したので４月１日から４日間、西都市教育委員会主催で市教委の緒方龍弥、浜砂一郎および緒方吉信の両氏、それに調査責任者として県文化財専門委員日高正晴、それに加えて妻高校郷土史研究部の旭吉法耿教諭ほか６名の生徒も参加して発掘調査が進められた。

まず１日目は丘陵斜面の造成地区123箇所、横穴墓が存在するということで調査員が２班に分れ、傾斜面全般にわたり確認調査を行ったが、別に横穴墓を発見することはできなかった。



囲横穴墓

それで午後からは全員でこの囲横穴墓の発掘調査を開始した。すでに数日前、囲地区民が玄室内部に入って副葬品を移動させており、土器類などは羨道の部分に納置してあった。

また羨門の所には黒色腐蝕土が約１ｍの高さに堆積していたが、玄室内部にも浸水がひどく約50cmも満水していたので、これの排水には相当の労力を要した。まず機械ポンプを利用して排水作業をしたが、約５分後には故障のためバケツリレーにより汲み出し、夕刻５時頃までかかって漸く排水を終ることができた。

２日目は午前９時30分頃から発掘調査を開始した。この日は排水後の堆土排除作業を行ったが、粘土性混土のため泥んこの作業となり、午後の後半になって漸く副葬品も出現し始め、３日目にほぼ玄室全般にわたり出土遺物の確認ができた。

４日目は玄室内部の実測調査を終え４日間にわたる緊急調査を終了することができた。

2. 位置と歴史的環境

一ツ瀬川中流域の左岸、茶臼原丘陵台地の西麓部には上穂北串木から茶臼原台地へ通ずる県道が開設されている。この路線は囲集落から上り坂になるが、その北側傾斜面の密柑造成地にこの横穴墓が発見された。

ところで、囲横穴墓の南西約350 m の地点には横穴式石室を有する国指定の千畑古墳が存在するが、この古墳は西都原の鬼の窟古墳とともに日向を代表する石室墳として著名である。

さらに、この千畑古墳から南の方約100 m の所には千畑横穴墓が群在している。この横穴墓群については昭和59年11月から60年にかけて3次にわたり、8基の横穴墓①について発掘調査を行った。

調査結果は内部形態として寄棟造の屋根形を呈し、特にその1号横穴墓は玄室内部の四隅に半肉彫りの装飾四本柱を有し、さらに7号横穴墓からは磨耗した舶載の方格規矩文鏡および円頭柄頭、そして9号横穴墓からは環頭大刀の双龍文柄頭などが出土し、西都原周辺の横穴墓群としてその特有性が注目された。

また穂北地区の西側丘陵傾斜面には上江・串木・平原などに横穴墓群が確認されるが、そのうち上江横穴墓群の16基と串木横穴墓群の4基については、昭和61年6月にそれぞれ確認の実測調査が行われた。

なお、この囲横穴墓の所在地から県道を上り詰めた上野地区では昭和58年11月に円形周溝②墓、59年6月に墳丘墓③が発見され、弥生時代終末期から古墳時代初頭頃にかけての遺跡を確認することができた。それで、この穂北一帯の丘陵傾斜面では約50基は下らない横穴墓が群在していることになる。

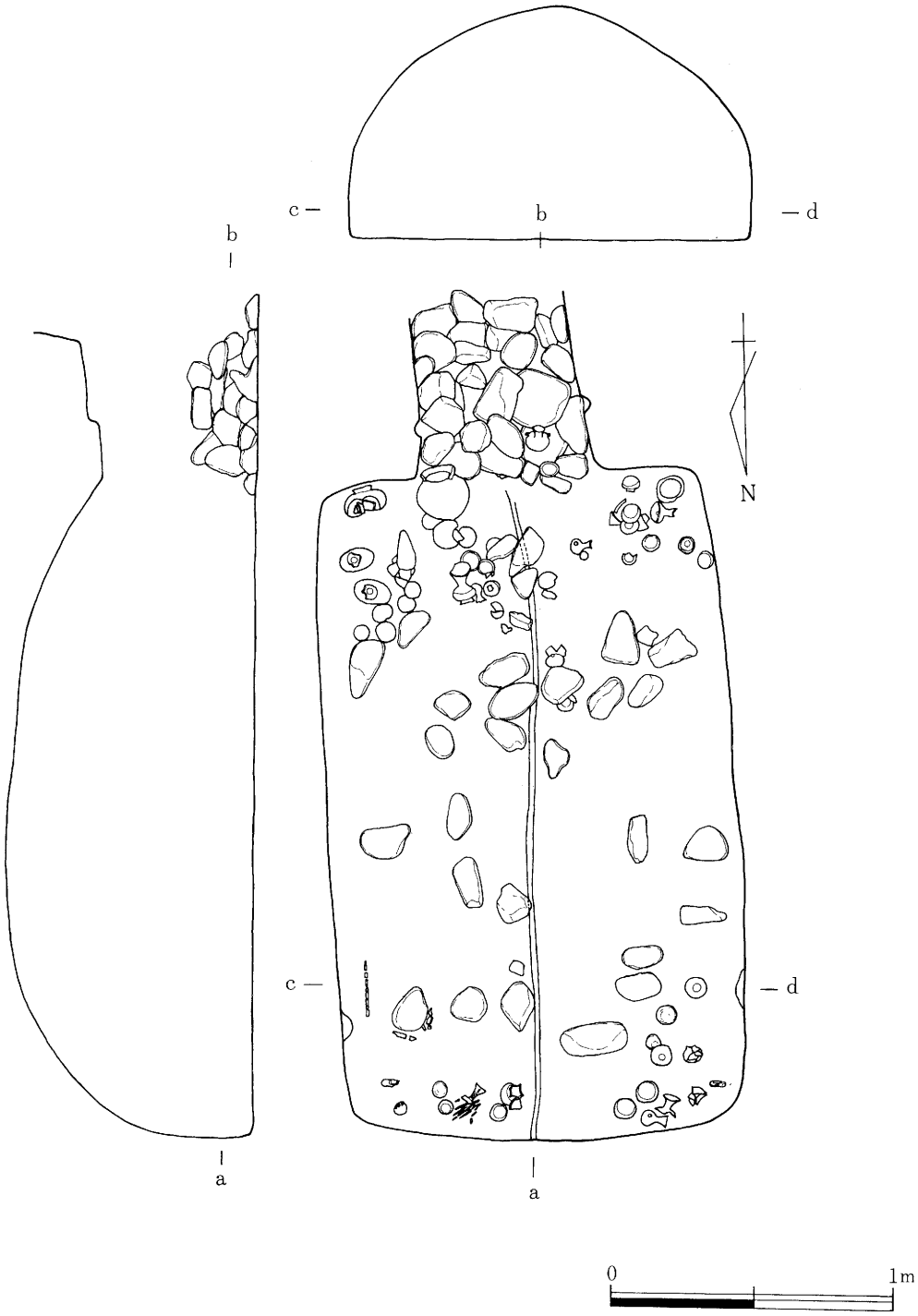
さらに茶臼原台地上には、舶載の四獣鏡および蛇行剣などを出土した大前方後円墳の児屋根塚を中心に、55基の国指定茶臼原古墳群が存在している。

それから茶臼原と同一台地上の南の方には、206基の古墳が群集する国指定新田原古墳群を眺望することができる。

それから、この茶臼原・新田原台地の西側に西都市の市街地を中に狭んで南北に走っている丘陵台地には、男狭穂塚・女狭穂塚の両巨大古墳をはじめ311基を擁する特別史跡西都原古墳群が展開している。

3. 内部構造

この横穴墓の玄室は短軸に羨道が開口している長方形様式の形態で、主軸線の方向は北2°



第１図　囲横穴墓実測図

東でほぼ南西の線上にあり、羨道は南に開口している。

玄室の奥行2.35m、幅1.45m（中央部）、高さ82cm、それに天井部は湾曲にカーブを描いているが、切妻様式の系統から変化した形態であり、天井部の中央には妻入大棟の痕跡が遺存している。

また、床面には何らの施設も設けられてないが、10cm～20cmの礫石が乱れた状態で中央部分に納置されてあった。

副葬品は玄室の入口部分と奥壁に沿っての2箇所に集中して埋葬され、中央部分には礫石のほかは何らの遺物も認められなかった。

羨道は長さ63cm、幅（中央部）56cm、それに高さ60cmを計測できたが、羨門から36cm入った両側壁に幅5cm、奥行3cmの掘込み遺構が施されており、また羨道には全面にわたり礫石（15cm～20cm）が納置されていた。

羨道の床面上に積み上げた礫の高さは約25cmになっているが、この礫石が閉塞用のものかどうか明確ではない。

4. 出土遺物

遺物は直刀をはじめ計672点が出土している。内訳は須恵器・須恵器片（蓋杯11点、杯15点、高杯1点、台付瑟1点、瑟3点、甕1点、俵壺3点、壺1点、提瓶1点、台付長頸壺1点、小破片38点）、土師器・土師器片（瑟1点、高杯4点、碗2点、壺1点、長頸壺1点、坩2点、深皿1点、深鉢1点、盌1点、鉢1点、小鉢1点、小破片92点）、直刀・直刀片3点、鉄斧2点、鉄鏃・鉄鏃片147点、鉄片311点、金環6点、勾玉1点、管玉8点、切子玉8点、木製切子玉1点である。

須恵器・土師器（第2図～第8図）

須恵器・土師器、計184点出土しているが、完形品も多く器形も多種多様である。出土地点は玄室奥と玄門寄りが多く、中央部からはほとんど出土していない。

各部の計測・詳細については、別葉表1須恵器計測表及び表2土師器計測表に記載するのでここでは省略する。

直刀（第9図　53）

玄室奥壁側より出土したものであるが、折損している。全長不明、刀身中央幅2.5cm、峰部の厚さ0.7cmである。

刀身は平造りであるが表面の剝離が進み、刀部も欠損が多く銹化著しい。

鉄斧（第９図　54、55）

玄室中央玄門寄り（54）と奥壁寄りの西壁側（55）よりそれぞれ出土したもので、54は現存長11.2cm、中央部幅 4.1 cm、刃部幅 3.8 cm、中央部厚さ 1.6 cm、55は現存長10.8cm、中央部幅 5.1 cm、中央部厚さ 1.0 cmである。両方とも刃部欠損が多く銹化著しい。

鉄鏃（第９図　56～61）

56から61は有茎細根鏃で、56は現存長41cm、身幅 0.7 cm、厚さ 0.2 cmの刀型、57は現存長 5.0 cm、身幅 0.7 cm、厚さ 0.5 cm、58は現存長 5.2 cm、身幅 0.6 cm、厚さ 0.5 cm、59は現存長 3.8 cm、身幅 0.9 cm、厚さ 0.5 cmである。

60・61は有茎平根鏃で、60は現存長 5.1 cm、身幅 2.7 cm、厚さ 0.7 cm、61は現存長 6.2 cm、身幅 1.8 cm、厚さ0.35cmである。その他鉄鏃は 141 点を加え、計 147 点が出土している。

金環（第９図　62～67）

玄室内より計６点出土しているが、ほとんど円形状で断面楕円形である。

62は直径 3.1 cm・幅 0.8 cm、63は直径 2.9 cm・幅 0.5 cm、64は直径 3.0 cm・幅 0.7 cm、65は直径2.75cm・幅 0.7 cm、66は直径 2.1 cm・幅 0.4 cm、67は３分の１種欠損しているが直径 2.3 cm・幅 0.7 cmである。銅芯に金張りをしているものと思え、部分的に金が残っている。

勾玉（第９図　68）

中央玄門寄りより出土したもので、長さ 3.1 cm、幅 1.1 cm、厚さ0.75cm、断面楕円形碧玉製の勾玉である。

管玉（第９図　69～76）

玄室中央部等から計８点が出土している。石材はすべて碧玉で１点を除きすべて完形である。各部の計測は表３のとおりである

表３　管玉計測表

単位：cm

図面番号	高さ(長さ)	幅	色調	石材	備考
９図－69	1.9	0.7	淡緑色	碧玉	
〃　－70	1.2	0.6	〃	〃	３分の１程欠損
〃　－71	2.7	1.0	〃	〃	
〃　－72	2.8	0.9	〃	〃	
〃　－73	3.0	0.9	〃	〃	
〃　－74	2.5	0.85	〃	〃	
〃　－75	3.0	0.75	〃	〃	
〃　－76	2.2	0.8	〃	〃	

切子玉（第9図　77～83）

玄室中央玄門寄りから計8点が出土している。石材はすべて水晶で完形である。

各部の計測は表4のとおりである。

表4　切子玉計測表　　単位：cm

図面番号	高さ(長さ)	最大幅	色調	石材	備考
9図－77	3.2	1.4	白色半透明	水晶	
〃 －78	2.7	1.7	〃	〃	
〃 －79	2.6	1.45	〃	〃	
〃 －80	2.4	1.6	〃	〃	
〃 －81	2.4	1.4	〃	〃	
〃 －82	2.45	1.45	〃	〃	
〃 －83	2.35	1.4	〃	〃	
〃 －84	2.55	1.4	〃	〃	

木製切子玉（第9図　85）

玄室中央部玄門寄りから出土したもので高さ(長さ)1.8cm、幅1.3cmで、断面楕円形・木質の切子玉であるが炭化している。

表1　須恵器計測表

単位：cm

図面番号	器　形	口　径	器　高	受部径	脚部径	色　　調	胎　土	焼　成	調　　整	出土地点	備　　考
2図－1	蓋　杯	13.5	3.55			灰　色 (Hue　N51)	2mm前後の粒子を含む	良　好	天井部ヘラ削り 内面天井部たて方向のナデ その他ヨコナデ	左　奥	天井部やや平担 口縁部は薄く端部は尖っている
〃－2	〃	13.0	4.5			灰　色 (Hue　N61)	〃	〃	〃	右袖部	天井部丸い 口縁端部丸い
〃－3	〃	13.3	3.8			灰　色 (Hue　N61)	〃	〃	天井部ヘラ削り その他ヨコナデ	中　央 玄門寄り	〃
〃－4	〃	13.2	4.0			灰　色 (Hue　N61)	〃	〃	天井部ヘラ削り 内面天井部たて方向のナデ その他ヨコナデ	左袖部	天井部丸い 口縁部は尖っている
〃－5	〃	12.4	4.2			灰　色 (Hue　N51)	〃	〃	〃	右　奥	口縁部わずかに破損 口縁端部丸い
〃－6	〃	12.4	3.8			灰　色 (Hue　N61)	〃	〃	〃	右袖部	天井部やや丸い 口縁端部丸い
〃－7	〃	12.1	4.3			灰白色 (Hue　N81)	〃	〃	〃	右　奥	天井部丸い 口縁端部尖っている
〃－8	〃	11.3	3.8			灰　色 (Hue　N51)	〃	〃	〃	〃	天井部丸い 口縁端部丸い
〃－9	〃	11.4	3.6			灰　色 (Hue　N61)	〃	〃	〃	左袖部	天井部丸い 口縁端部丸い 口縁部一部欠損
〃－10	〃	11.5	3.5			灰　色 (Hue　N71)	〃	〃	〃	中　央 玄門寄り	天井部丸い 口縁端部丸い 口縁部一部欠損
〃－11	〃	11.7	4.0			灰黒色 (Hue　31)	〃	不　良	表面風化により摩耗	右　奥	〃
〃－12	高　杯	11.0	16.2		11.0	暗青灰色 (Hue　5B3/1)	〃	良　好	ヨコナデ	左　奥	長方形2段三方透し 自然釉 脚部2本の平行沈線
3図－13	杯	12.4	3.5	14.6		赤褐色 (Hue 5YR 4/8)	微砂粒を含む	〃	底部ヘラ削り その他ヨコナデ	左　奥	口唇部丸い 受部との境に沈線を巡らす
〃－14	〃	11.2	4.0	13.4		灰　色 (Hue　N61)	2mm前後の粒子を含む	〃	〃	中　央 玄門寄り	口縁部は薄く尖っている
〃－15	〃	11.1	4.6	13.1		灰白色 (Hue　N71)	〃	〃	〃	左袖部	口唇部尖っている
3図－16	杯	10.1	4.0	12.5		灰　色 (Hue　N61)	2mm前後の粒子を含む	良　好	底部ヘラ削り その他ヨコナデ	右　奥	口唇部尖っている 受部との境に沈線を巡らす 十字状のヘラ記号
〃－17	〃	9.9	3.6	12.4		灰　色 (Hue　N51)	〃	〃	〃	玄門部	口唇部丸い 受部との境に沈線を巡らす
〃－18	〃	10.7	3.5	13.1		灰　色 (Hue　N51)	〃	〃	天井部ヘラ削り その他ヨコナデ	左袖部	口唇部は尖っている 受部との境に沈線を巡らす
〃－19	〃	11.9	4.2	14.5		灰　色 (Hue　N61)	〃	〃	天井部ヘラ削り 内面底部たて方向のナデ その他ヨコナデ	左袖部	口唇部丸い 受部との境に沈線を巡らす 底部に2本の直線のヘラ記号
〃－20	〃	11.2	3.9	14.0		灰　色 (Hue　N61)	〃	〃	〃	玄門寄り	口唇部は丸い 受部との境に沈線を巡らす 底部に十字状のヘラ記号
〃－21	〃	10.6	3.6	12.9		灰白色 (Hue　N71)	〃	〃	〃	右　奥	口唇部は尖っている 受部との境に沈線を巡らす 底部に十字状のヘラ記号
〃－22	〃	10.6	3.7	13.3		灰　色 (Hue　N51)	〃	〃	〃	中　央 玄門寄り	口唇部は尖っている 口唇部欠損が多い
〃－23	〃	10.5	3.8	12.9		灰白色 (Hue　N71)	〃	〃	〃	右袖部	口唇部は丸い 受部との境に沈線を巡らす 底部に4本の直線のヘラ記号
〃－24	〃	9.8	3.2	12.1		灰　色 (Hue　N61)	〃	〃	ヨコナデ	左袖部	口唇部は尖っている 受部との境に沈線を巡らす
〃－25	〃	10.6	3.6	12.3		灰　色 (Hue　N61)	〃	不　良	底部ヘラ削り その他ヨコナデ	中　央 玄門寄り	口唇部は丸い
〃－26	〃	11.5	2.55	13.4		灰　色 (Hue　N61)	〃	やや 不　良	〃	中　央 玄門寄り	口唇部は丸い 口唇部が少し欠損 変形しており底部平担
〃－27	〃	11.1	3.4	12.8		灰白色 (Hue　N71)	〃	不　良		右　奥	立ちあがりが短く内傾 口唇部は尖っている 受部との境に沈線を巡らす

図面番号	器　形	口　径	器　高	受部径	脚部形	色　　調	胎　土	焼　成	調　　整　整	出土地点	備　　考
4図－28	台付甕	15.0	18.1		7.7	灰　色 (Hue　N61)	微砂粒を含む	良　好	ヨコナデ	中　央 玄門寄り	口縁部に2段にたて方向の沈線を巡らしている。胴部･頸上部には刺穴状の文様を施している。
〃－29	甕		現存 11.7			灰白色 (Hue 7.5YR7/1)	1mm前後の砂粒を含む	やや 不　良	ヨコナデ	〃	口縁部に1本、頸部・胴部に2本の沈線を巡らしている。
〃－30	〃		現存 14.4			灰　色 (Hue　N61) 淡黄色 (Hue　5Y 8/3)	2mm前後の粒子を含む	良　好	底部のヘラ削り その他ヨコナデ	左　奥	口唇部欠損 胴上部で最も膨らむ
〃－31	〃		現存 11.6			灰白色 (Hue　N71)	〃	〃	底部ナデ その他ヨコナデ	左袖部	口唇部欠損 胴中央部で最も膨らむ
5図－33	甕	20.0	37.4			灰　色 (Hue　N61)	〃	〃	口縁部ヨコナデ 胴部以下は叩き調整のあとナデ調整	玄　門	口縁部に1本の沈線を巡らしている。器厚は全体的に薄い。胴上部で最も膨らむ。
〃－34	俵　壺	10.7	22.9			灰　色 (Hue　N61)	〃	〃	口縁部ヨコナデ 胴部以下は	右袖部	口縁部3分の1程欠損
〃－35	〃	11.7	26.8			灰白色 (Hue　N71)	〃	〃	口唇部ヨコナデ 胴部以下は半分叩き調整・半分は叩き調整あとナデ	〃	口縁部3分の1程欠損 口縁部に1本の沈線を巡らす
6図－36	壺	12.1	21.2			灰白色 (Hue　N81)	1mm前後の粒子を含む	やや 不　良	口唇部ヨコナデ 叩き調整	中　央 玄門寄り	口縁部一部破損 口縁部は薄く尖っている 胴上部で最も膨らむ
〃－37	提　瓶	4.2	21.8			灰　色 (Hue　N51)	2mm前後の粒子を含む	良　好	口縁部ヨコナデ 胴部以下かき目調整	玄　門	口縁部半分程破損 口唇部はわりと厚く尖っている
〃－38	台付 長頸壺	8.2	現存 20.3			青灰色 (Hue　5B6/1)	〃	〃	ヨコナデ	左袖部	口唇部は尖っている。口縁部・脚部破損。胴上部で最も膨らみ、そこに1本の沈線を巡らす。

表2　土師器計測表

単位：cm

図面番号	器　形	口　径	器　高	受部径	脚部径	色　　調	胎　土	焼　成	調　　整	出土地点	備　　考
4図－32	甕		現存 19.8			浅黄橙 (Hue 10YR 8/3)	2mm前後の粒子を含む	良　好	ヘラ磨き調整	左袖部	口縁部欠損 胴上部で最も膨らむ
7図－39	高　杯	20.3	15.7		17.4	橙 (Hue　5YR 7/6)	〃	〃	表面の風化著しい ヘラ磨き調整	右　奥	杯部・脚部一部欠損 口縁部に段をもうけている 口唇部は丸い
〃－40	〃	20.5	16.8		14.3	橙 (Hue　5YR 7/6)	〃	〃	ナデ調整	左袖部	杯部・脚部一部欠損 口唇部は丸い
〃－41	〃		現存 11.2		15.2	浅黄橙 (Hue 10YR 8/3)	〃	〃	表面の風化著しい ヘラ磨き調整	左　奥	杯部欠損
〃－42	〃	13.5	7.9		8.2	浅黄橙 (Hue 7.5YR 8/4)	〃	〃	〃	中　央 玄門寄り	杯部半分程欠損、脚部一部欠損 口唇部は丸い
〃－43	碗	13.7	5.2			橙 (Hue　5YR 7/6)	〃	〃	表面風化著しい	左　奥	口縁部一部欠損 丸底 口唇部は丸い
〃－44	〃	14.5	5.4			橙 (Hue　5YR 7/6)	〃	〃	〃	〃	口縁部一部欠損 口唇部は丸い
〃－45	深　皿	14.8	4.2			暗赤褐色 (Hue 2.5YR 3/4)	〃	〃	表面風化著しい ヘラ磨き調整	玄　門	口縁部3分の1程欠損 口唇部は丸い
8図－46	壺	6.5	17.6			浅黄橙 (Hue 7.5YR 8/4)	2～4mm前後の粒子を含む	不　良	〃	左　奥	口縁部3分の2程欠損 胴上部で最も膨らむ 底部はわりと厚い
〃－47	深　鉢	14.3	10.2			橙　色 (Hue　5YR 7/6)	2mm前後の粒子を含む	良　好	表面風化著しい	右袖部	口縁部・底部一部欠損 口唇部は丸い
〃－48	盌	11.2	6.6			黄橙色 (Hue 10YR 8/6)	2～4mm前後の粒子を含む	〃	〃	左袖部	口唇部は丸い
〃－49	坩		現存 9.6			黒灰色 (Hue　N 31)	〃	やや 不　良	ナデ調整	左　奥	口縁部欠損 胴上部で最も膨らむ
〃－50	〃	5.8	7.8			灰白色 (Hue 2.5YR 8/6)	2mm前後の粒子を含む 白雲母多量混入	〃	表面風化著しい ヘラ磨き調整	中　央 玄門寄り	口縁部一部欠損 口唇部は尖っている
〃－51	鉢	14.2	6.1			浅黄橙 (Hue 7.5YR 8/3)	2mm前後の粒子を含む	〃	〃	左　奥	口縁部ほとんど欠損 口唇部は尖っている
〃－52	小　鉢 (ミニチュア)	9.0	現存 6.2			黄　橙 (Hue 10YR 7/4)	〃	〃	表面風化著しい	中　央 玄門寄り	口縁部一部欠損 底部欠損 口唇部は丸い

5. まとめ

以上、囲横穴墓の内部構造および副葬品などにつき論述してきたが、特にこの横穴墓の内部形態が、日向中央平野部地帯にて一般的に認められる形式と異っているところは、玄室が妻入様式の長方形を呈しているということである。それに加えて、極めて豊富な副葬品を有していたことも特色づけられる。

すなわち多量の須恵器類、土師器類のほかに、碧玉製の勾玉、管玉それに水晶製の切子玉なども検出された。

また興味深いことは、この囲横穴墓の存在する丘陵西側傾斜面には千畑横穴墓、上江横穴墓、平原横穴墓それに串木横穴墓などを含む50数基の穂北横穴墓群が群在しているが、その中で古式横穴墓としての寄棟造形式などとは別系統の長方形様式の横穴墓が同一地区内に構築されていることは関心をそそられるところであるが、さらにすぐ近くには日向の後期古墳を代表する横穴式石室墳としての国指定千畑古墳も築造されている。

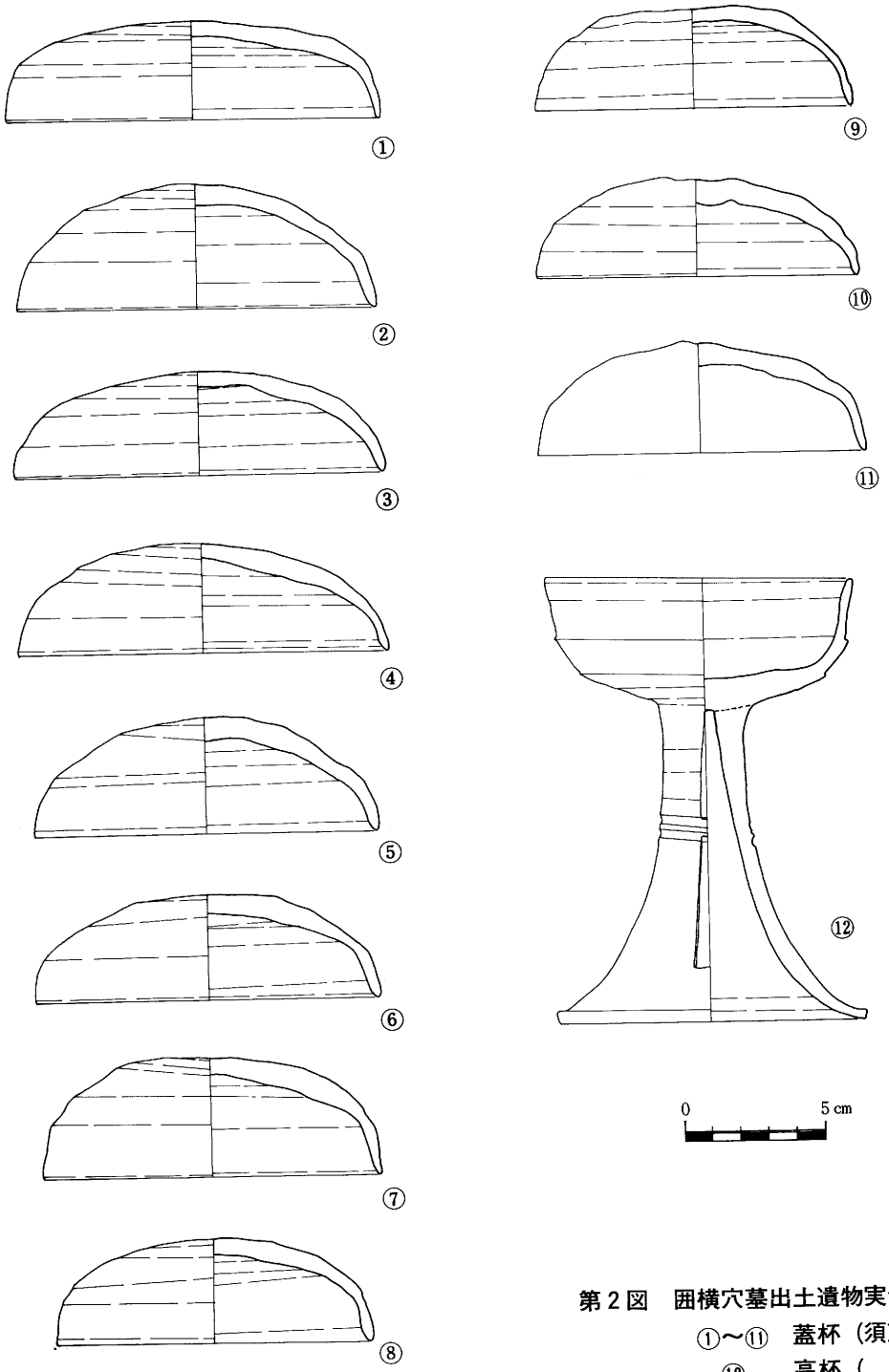
それで未確認まで入れると恐らく100基近い基数になる穂北横穴墓群、および前述した千畑古墳などに対して高塚古墳系統と思われる長方形様式の玄室を有する囲横穴墓はどのように関連しているのか考究しなければならないが、他方すぐ上の台地上に存在する茶臼原古墳群および、この丘陵台地と相対して西側台地上に展開する西都原古墳群などとも何らかの関係を有しているのかどうか、今後、検討してみなければならない。

註

① 日高正晴「日向における千畑横穴墓とその考察」『西都原古墳研究所年報』第3号
西都市教育委員会　昭和60.3

② 日高正晴「上野遺跡1号」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集
西都市教育委員会　1985.5

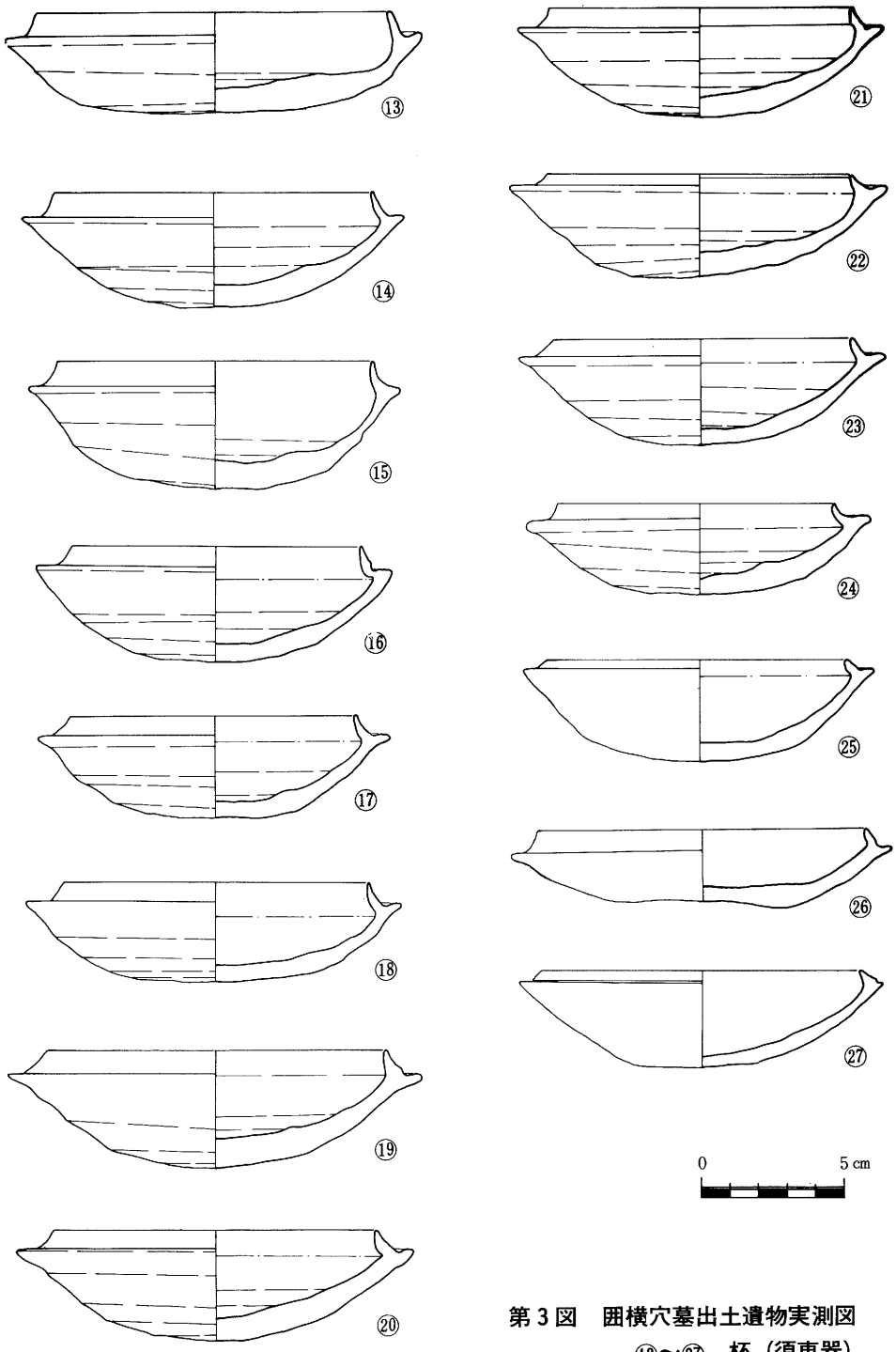
③ 日高正晴「上野遺跡2号」『西都原古墳研究所年報』第2号
西都市教育委員会　1985.3



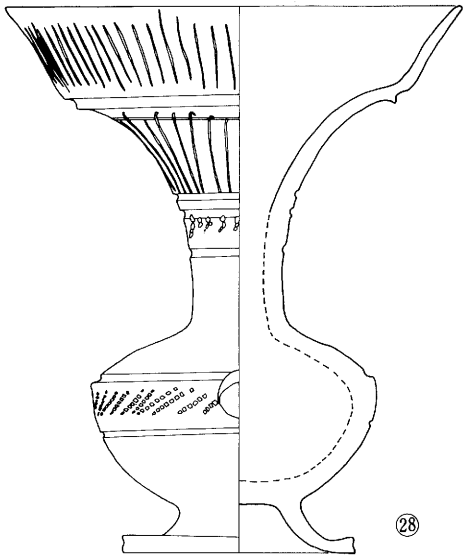
第２図　囲横穴墓出土遺物実測図

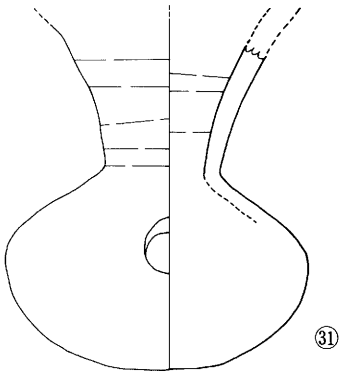
①～⑪　蓋杯（須恵器）

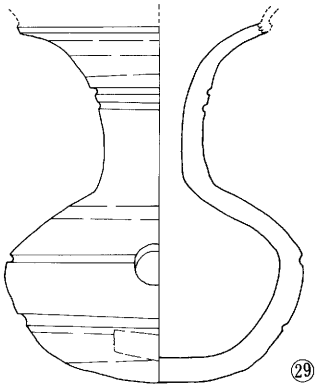
⑫　　高杯（　〃　）

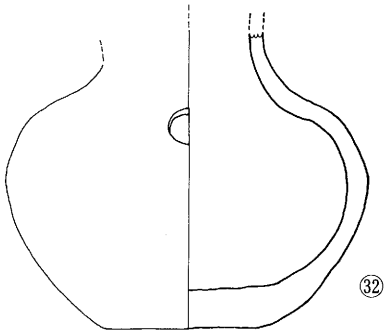


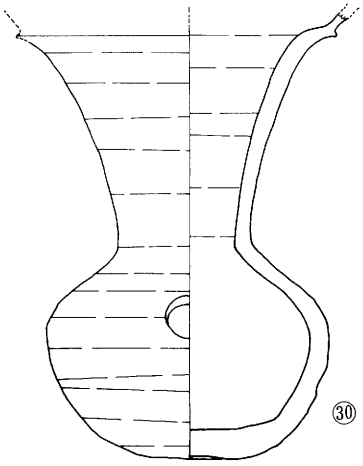
第3図　囲横穴墓出土遺物実測図
⑬～㉗　杯（須恵器）







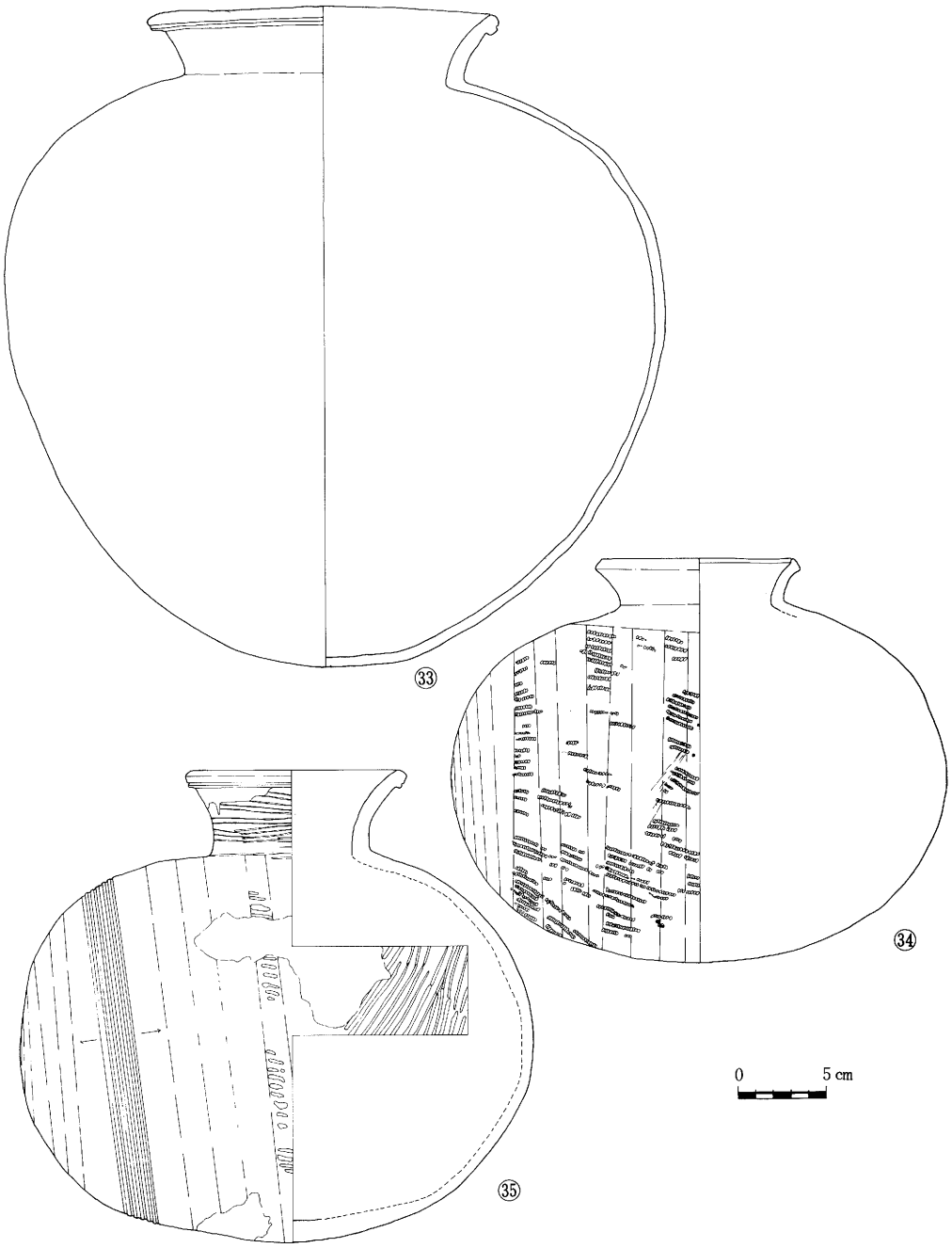




第4図　囲横穴墓出土遺物実測図

㉘～㉛　瑕（須恵器）

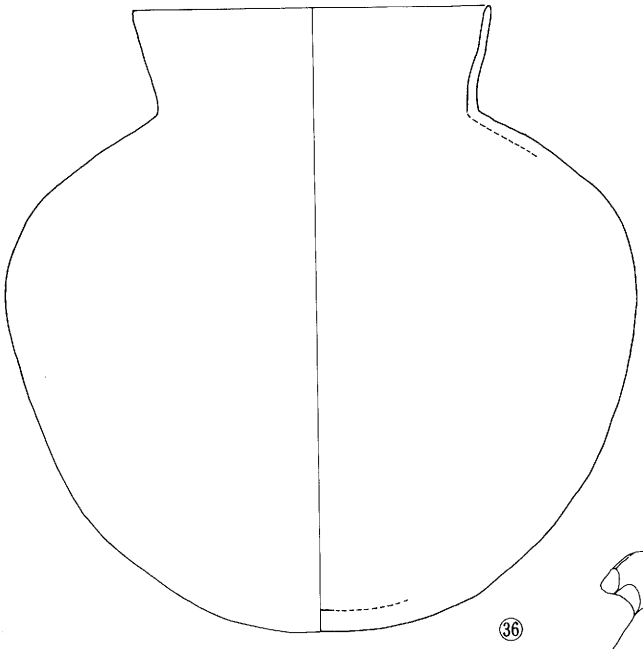
㉜　　瑕（　〃　）

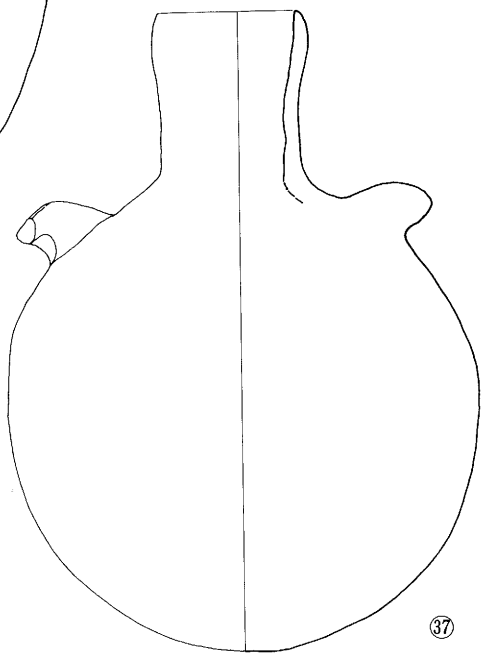


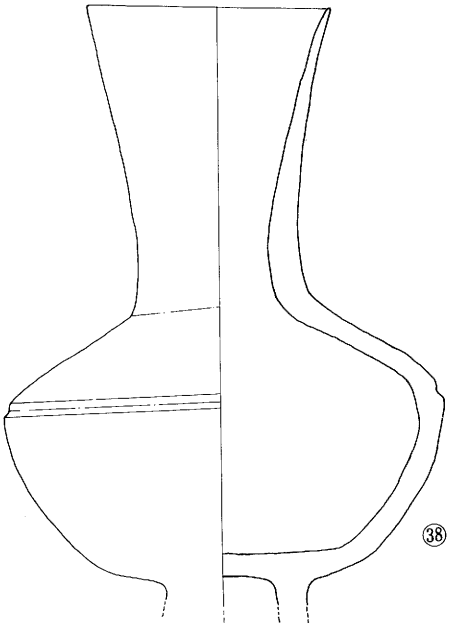
第５図　囲横穴墓出土遺物実測図

㉝　甕（須恵器）

㉞ ㉟　俵壺（　〃　）





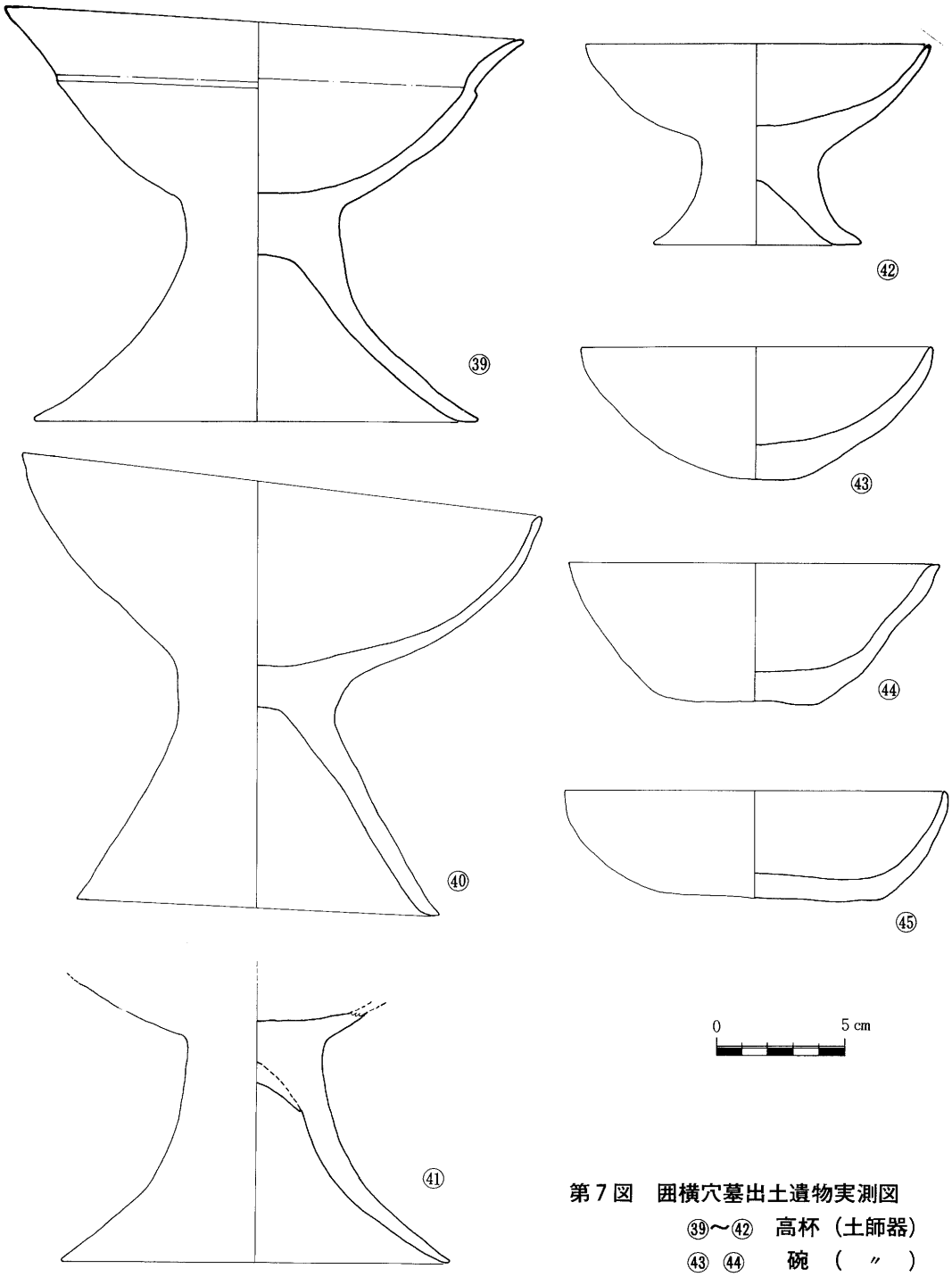


第6図　囲横穴墓出土遺物実測図

㊱　壺　（須恵器）

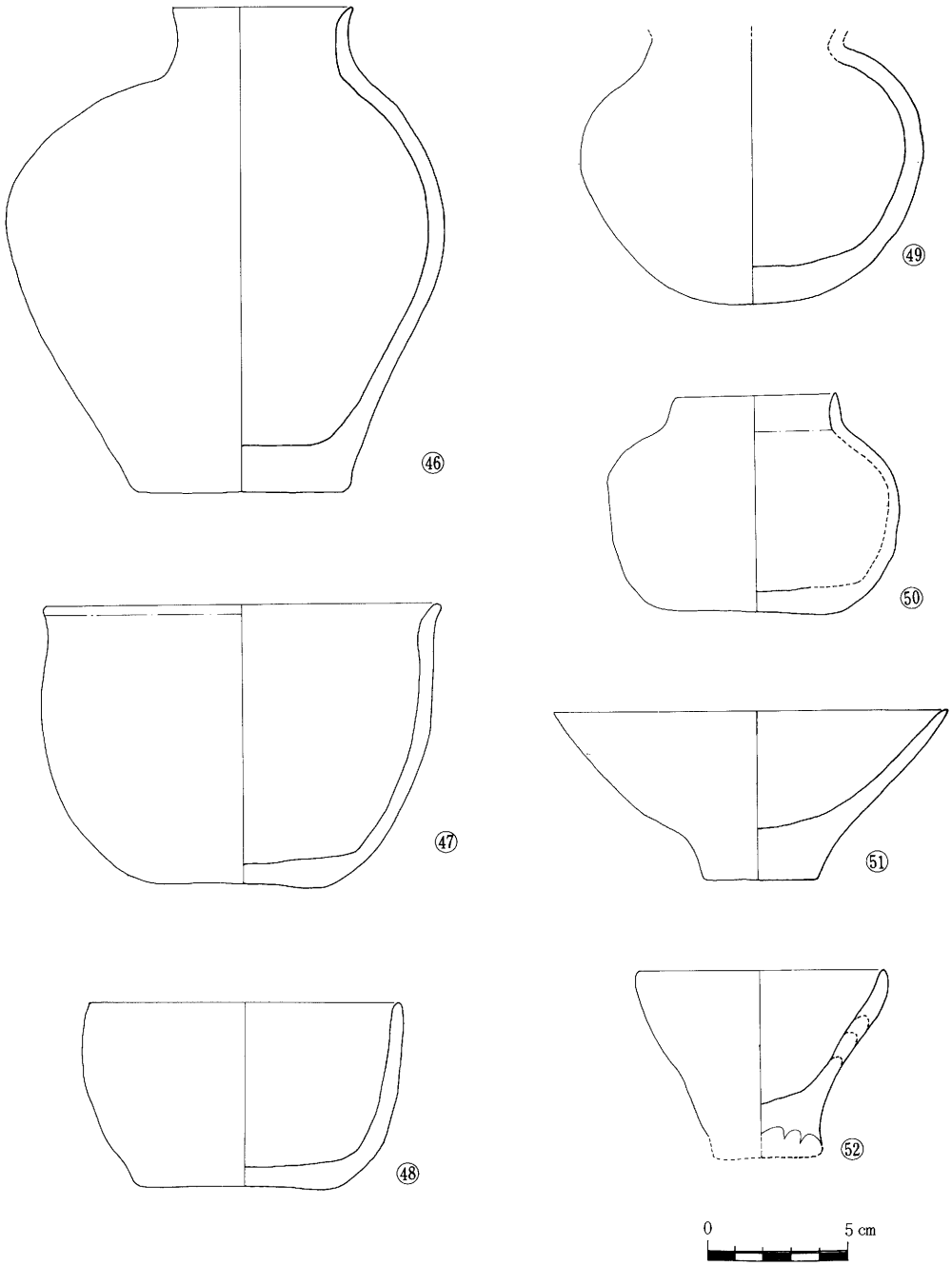
㊲　堤瓶（　〃　）

㊳　台付長頸壺（須恵器）



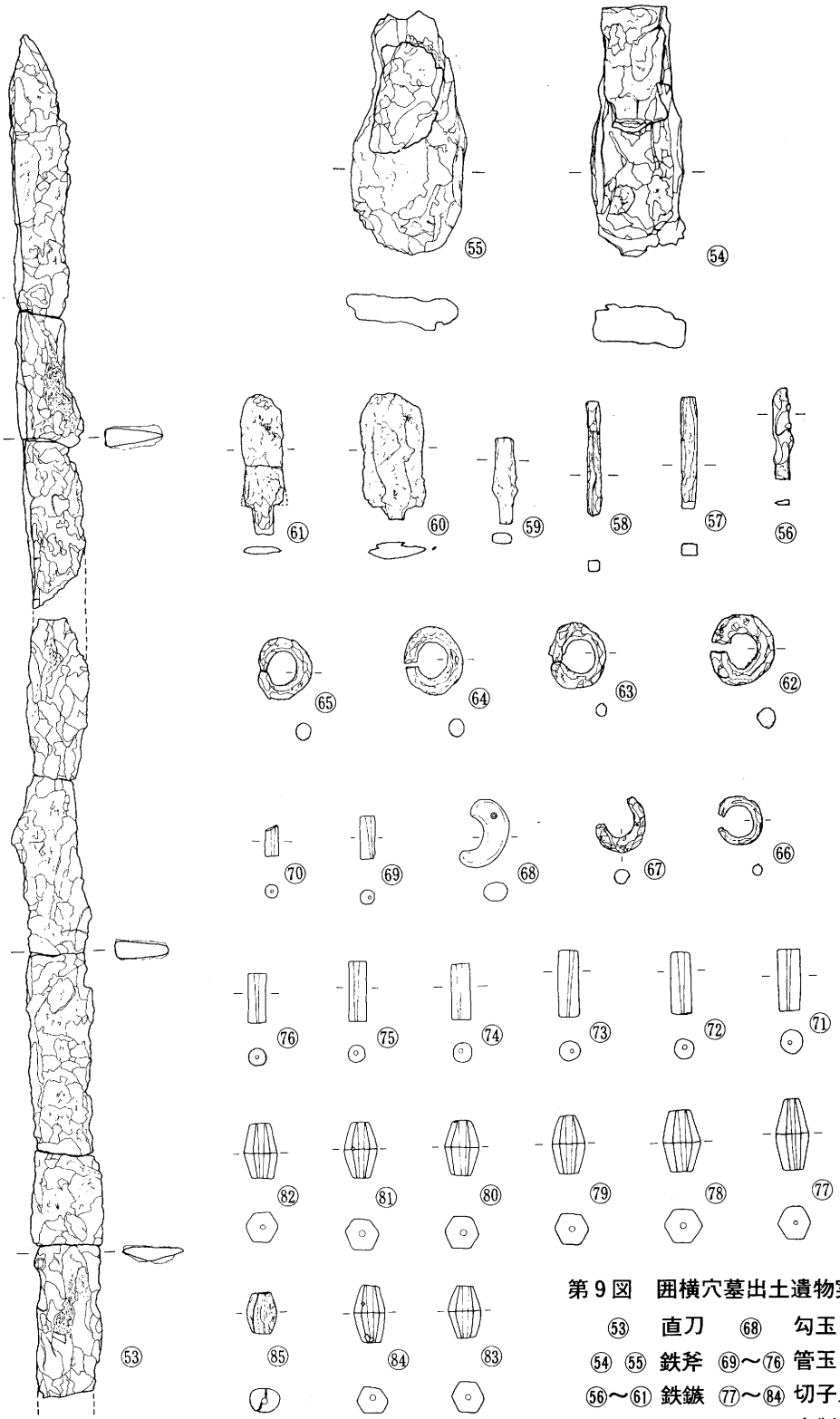
第７図　囲横穴墓出土遺物実測図

㊴～㊷　高杯（土師器）
㊸ ㊹　碗（　〃　）
㊺　深皿（　〃　）



第8図　囲横穴墓出土遺物実測図

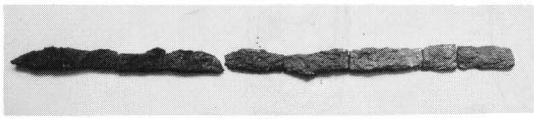
㊻ 壺（土師器）　㊾㊿ 坩（土師器）
㊼ 深鉢（　〃　）　51 鉢（　〃　）
㊽ 盌（　〃　）　52 小鉢（　〃　）



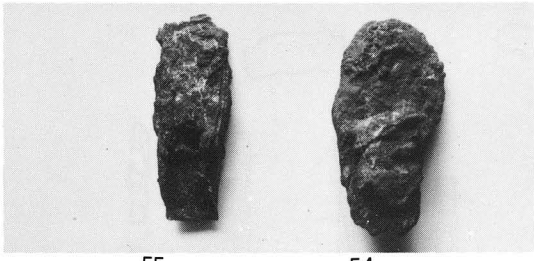
第９図　囲横穴墓出土遺物実測図

㊸	直刀	㊽	勾玉
㊹ ㊺	鉄斧	㊾～㊻	管玉
㊻～㊶	鉄鏃	㊼～㊹	切子玉
㊷～㊼	金環	㊺	木製切子玉

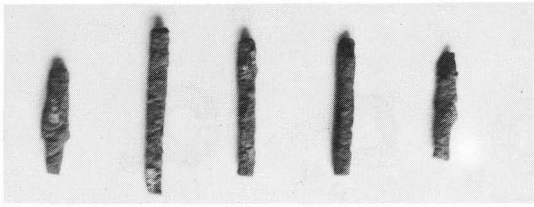
43 44 45



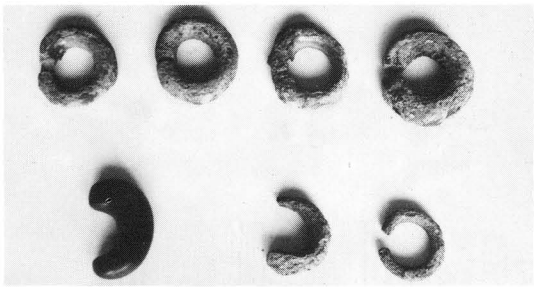
53



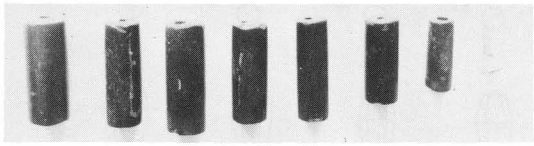
55 54



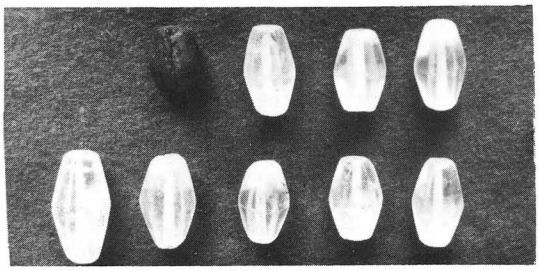
56 ～ 59



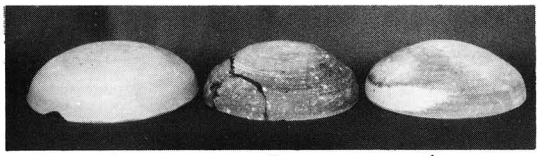
62 ～ 68



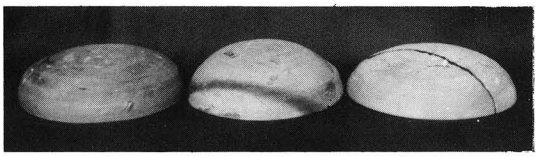
69 ～ 76



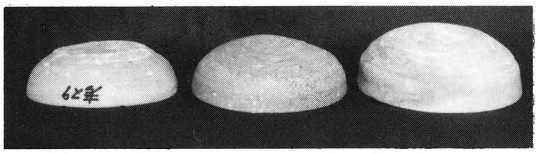
77 ～ 85



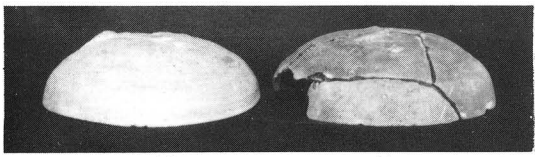
6 5 4



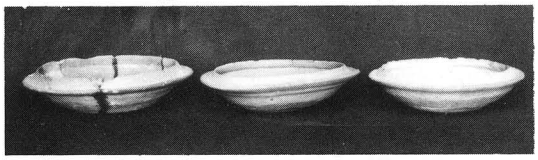
1 2 3



9 8 7



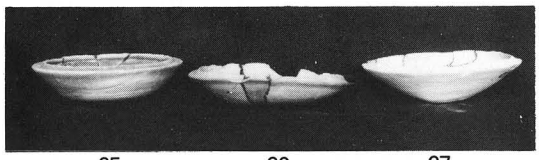
10 11



19 20 21

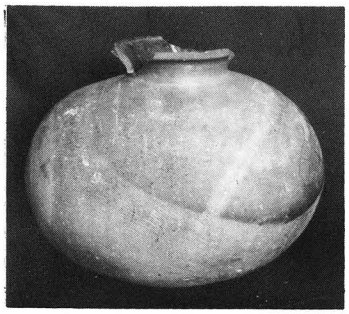
16 17 18

22 23 24



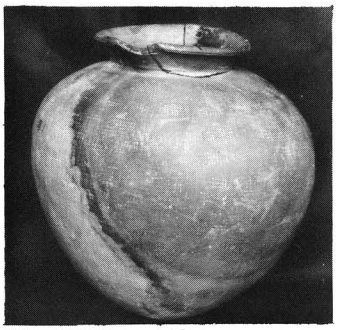
25 26 27

13 14 15

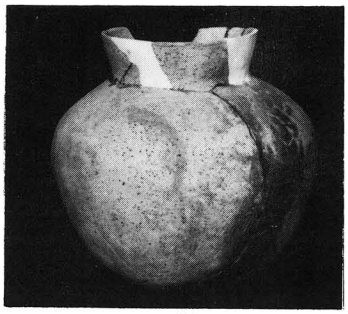


34

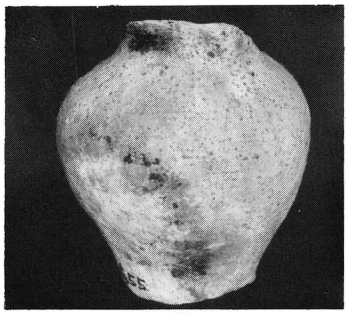
35



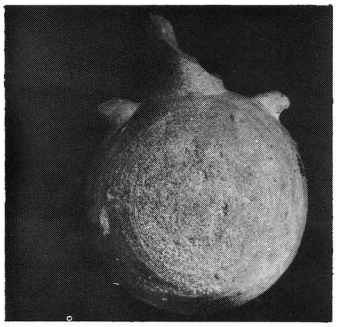
33



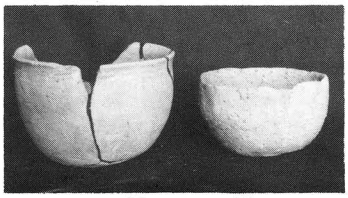
36



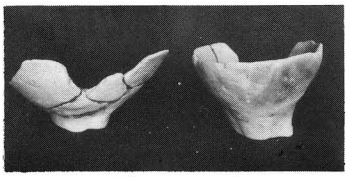
46



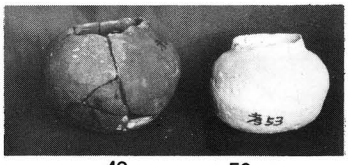
37



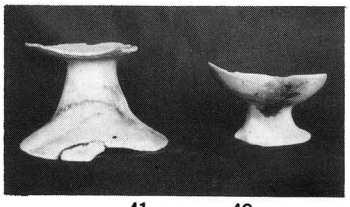
47 48



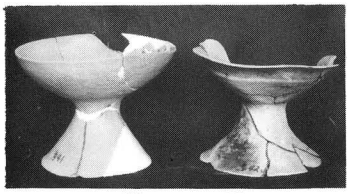
51 52



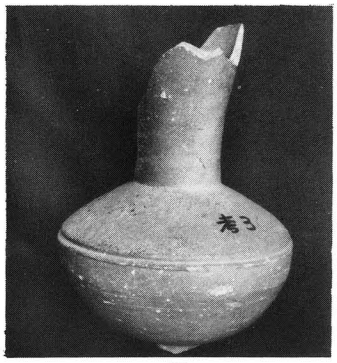
49 50



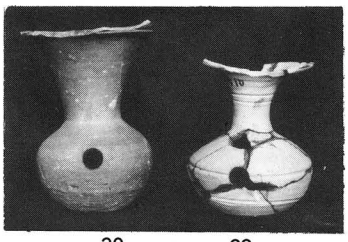
41 42



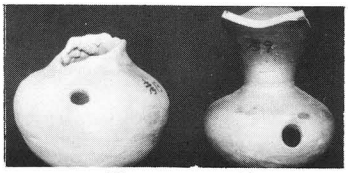
40 39



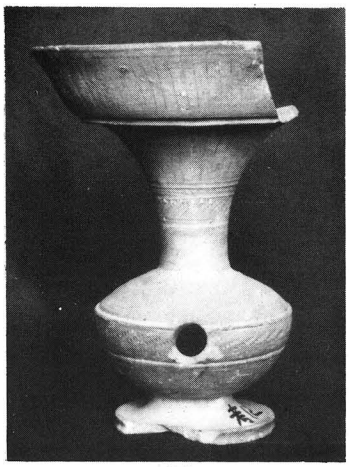
38



30 29



32 31



28

12

元地原地下式墳墓群発掘調査報告

例　　言

1.　本書は、昭和45年１月12日から１月30日までに西都市教育委員会が実施した。元地原地下式墳墓群に関する発掘調査報告書である。

2.　調査関係者は次のとおりである。

調査主体・西都市教育委員会

教　育　長　　植野　守

社会教育課長　　間世田　博

社会教育係長　　岡田　留

文化財係長　　緒方龍弥

公民館主事　　緒方吉信（兼市立博物館管理）

調査員

県文化財専門委員　　日高正晴

調査担当者　　緒方龍弥

同　上　　緒方吉信

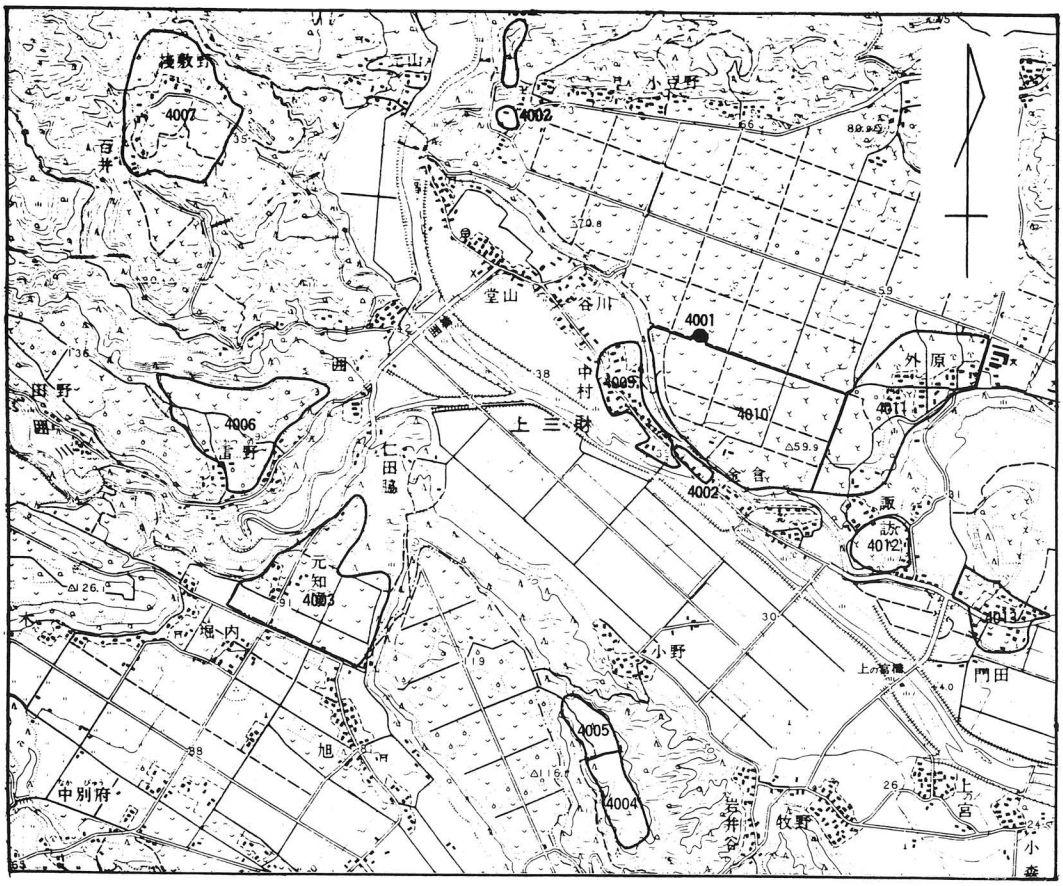
調査協力者　　加藤成夫（県社会教育課）

同　上　　茂山　護（西都原資料館）

3.　本調査による出土遺物は、市立博物館の閉館に伴い現在西都市歴史民俗資料館に保存し展示される。

4.　発掘調査は、日高正晴・緒方龍弥・緒方吉信が担当し、加藤成夫氏・茂山護氏の協力を得て実施した。

5.　本稿の執筆は西都原古墳研究所が行い、日高正晴・緒方吉信・蓑方政幾が担当した。編集等は緒方吉信が行った。



遺跡所在地図

1：25,000

500m　0　500　1000　1500

三財地区の遺跡

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代
4001	常心塚古墳	大字上三財・字常心原7831	方墳	古墳
4002	三財村古墳群	大字下三財・上三財・加勢	古墳	古墳
4003	元地原遺跡	大字上三財字元地原	地下式墳埋蔵地	古墳
4004	中ケ原遺跡	大字上三財字中ケ原	散布地	縄文～古墳
4005	小野城跡	大字上三財字中ケ原	城跡	中世
4006	雷野遺跡	大字上三財字雷野	散布地	弥生～古墳
4007	桟敷野遺跡	大字上三財字桟敷野	散布地	縄文～奈良
4009	中村遺跡	大字上三財字中村	散布地	古墳～江戸
4010	常心原遺跡	大字上三財字常心原金倉上	地下式墳埋蔵地散布地	弥生～古墳
4011	外原遺跡	大字上三財字下外原西宝来	散布地	古墳～平安
4012	諏訪遺跡	大字上三財字諏訪	散布地	古墳～平安
4013	門田遺跡	大字上三財字門田前田・北水戸	散布地	古墳～平安

元地原地下式墳墓群

Ⅰ　発掘調査の経過

昭和44年12月31日、西都警察署から電話連絡があり、市内上三財と国富町との郡境附近で人骨が発見されたので、埋蔵文化財関連の有無について現地調査をしてくれるようにとのことであった。

早速、西都市教育委員会に連絡をとって現地に赴く、調査結果は地下式墳であることが判明したので、市教育委員会においては発掘調査を行うことに決った。

ところで、現場は上三財元地原の畑地の一角で、綾川総合開発の一環として畑地改良事業中、地主の疋田好雄氏がブルトーザーで桑畑の開田作業をしていたところ、突然、地面が陥没し、径約１ｍの穴があき玄室内部が露見した。発見が年末であったため、発掘調査は１月12日から開始された。

元地原地下式墳墓群台地

まず西都市教育委員会から文化財担当の緒方龍弥氏、それに社会教育課から緒方吉信氏が参加され、そして発掘調査担当者として日高正晴があたった。また県教育委員会社会教育課からは加藤成夫氏が来西され、午前10時から発掘調査が始められた。

地下式墳発見の現場では土地改良事業担当の坂下組の従業員が、すでに玄室内部の副葬品を取り出し段ボールに入れていたので、玄室内部の副葬品の埋葬箇所が不明になり玄室の内部調査に支障を来した。

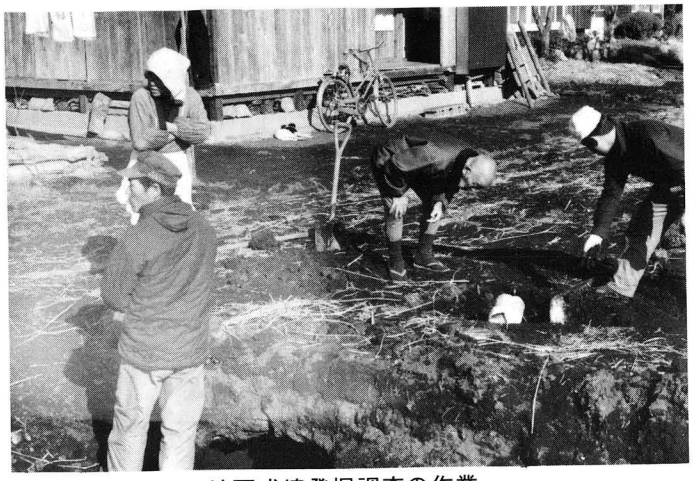
この最初に発見された墳墓は地下式１号墳と名づけたが、さらに14日には２基の地下式墳が発見された。

１基は１号墳の西方約13ｍの地点、もう１基はその南約25ｍの地点、それで前者を２号墳、後者を３号墳とした。この２基の地下式墳については16日から発掘調査を開始した。

次いで18日には、また３基の地下式墳が発見された。３号墳の南西約23ｍ、高山藤茂氏宅

より東側約6mの地点に4号墳、そのすぐ南約5mの地点に5号墳、そしてその南東約6mの所に6号墳が現われた。

この3号・4号・5号の各地下式墳については20日と21日の両日に発掘調査を進めたが、この調査には西都原資料館の学芸員・茂山護氏も参加された。さらに24日には6号墳の東北約8mの地点に7号墳が発見されたので26日に発掘調査を行った。



地下式墳発掘調査の作業

Ⅱ　位置と歴史的環境

県道高鍋高岡線が西都市三財の中心街、岩崎で上三財路線に分岐するが、この県道に沿って三財川にかかる囲橋を渡り、坂を上り詰めると標高90mの元地原台地が開ける。

この地区は郡境と称され、東諸県郡の国富町と境を接っている。またこの台地一帯は薩摩原とも称され、大正年間、宮崎県知事有吉忠一氏により開田事業が進められた所である。

なお、この薩摩原台地につづいて東南方には広く開けた六野原台地が横たわっている。

この元地原地下式墳の所在地は、ちょうど311基の古墳を擁する日向最大の西都原古墳群と前方後円墳18基を含む57基の古墳が群在する本庄古墳群との中間内陸部地帯にあって、この薩摩原台地上では、はじめての古墳時代遺跡調査として注目されたが、その南東の六野原台地では昭和17年9月、陸軍の飛行場建設のための事前調査として、宮崎県主催にて高塚墳11基、地下式墳29基の発掘①調査が行われた。

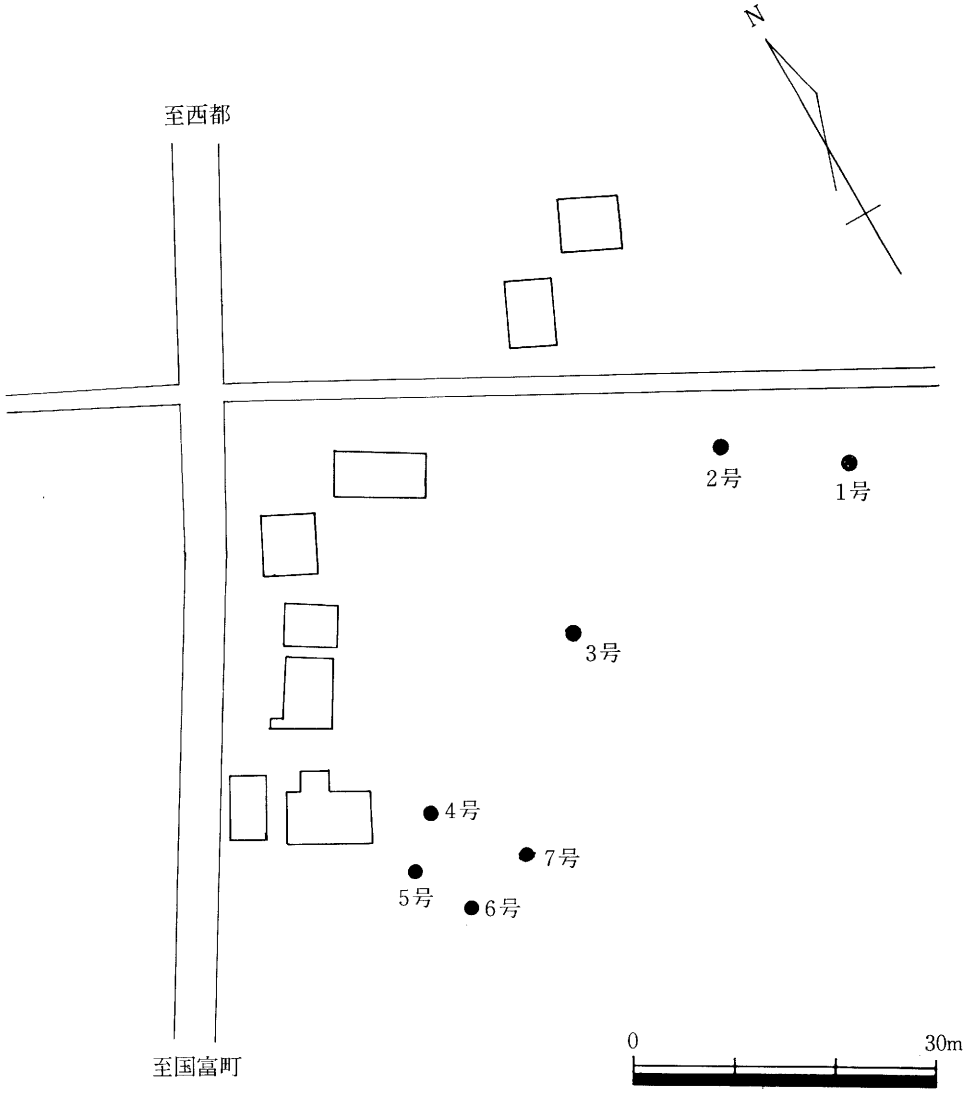
ところで、この元地原台地は三財川の右岸台地上に位置しているが、一方左岸台地上、下三財地区の亀塚、前原一帯には45基の三財古墳群が現存している。

また、上三財地区のほぼ中央部には孤立して1基、土堤を有する方形墳で全国的に稀有な国指定の常心塚古墳が姿を現わしているが、なおこの常心原地区には南九州特有の地下式墳も数基発見されている。

さらに本庄古墳群に至る旧八代村一帯にも多数の地下式墳が確認されている。

まず、元地原から南に県道に沿って約2km、大坪・井水地区に4基、そして高田原台地上

の市の瀬では９基、そして深年川の右岸台地、飯盛にも２基地下式墳が発見されているが、さらに本庄町の台地上には高塚墳に混在して、これまでに31基の地下式墳が認められている。



第１図　元地原地下式墳位置図

Ⅲ　発掘調査の結果

1.　地下式第１号墳

(1)　内部構造

玄室の形態は主軸に対し直角の長方形状を呈し、四隅は角張っている。主軸線の方向は北30°東になっているが、羨道は玄室の長軸南側中央部に開口しており、また羨門付近は自然礫（径30cm～50cm）で閉塞してあった。

竪坑部は崩壊していたので明らかでない。玄室の床面には約20cm～30cmの扁平な自然石を敷きつめ、その透き間には小石が詰め込まれていた。そして玄室の北側と東西の壁面に沿って、三方の周囲を15cm～25cmの立石で囲んでいた。

天井部は大部分崩壊していたが、ドーム形式と推定される。玄室の奥行（中央部）1.95ｍ、幅（中央部）2.45ｍ、それに高さは推定約90cm(天井部崩壊)、羨道は幅約90cm、高さ59cmであるが、長さは土地改良作業中に羨門が崩壊して不明、なお羨道は径30cm～50cmの自然石で閉塞されていた。

次に、地下式墳の構築された地層について述べてみる。この元地原地下式墳墓群の層位は、大体、同一地層であるが、この１号墳でその類別をしておく。

まず地表面から43cmが黒色腐蝕土層（Ⅰ層）、その下部45cmが硬質黒色土層（Ⅱ層）、さらに32cm下って黄褐色ボラ層（Ⅲ層）、そして床面まで50cmは黒褐色粘土質層（Ⅳ層）となっている。

以上のように地表面からⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層と区分できるが、この地下式墳の玄室主体部は第３層も掘削していた。

(2)　出土遺物

遺物は直刀をはじめ計20点が出土しているが、ほとんどの遺物が調査前に取りあげられており、位置関係については不明である。内訳は直刀１点、鉄鏃・鉄鏃片５点、刀子１点、須恵器９点（高杯１点、蓋杯４点、杯３点、坩１点)、土師器４点（蓋杯１点、碗３点)である。

直刀（第９図　１）

腐食による表面の剝離が著しく、かなり破損している。現存長60.5cm、身幅３cm、峰部の厚さ0.5cmである。

刀身は平造りである。

鉄鏃（第９図　２～６）

２・３・４はノミ頭式の有茎平根鏃で、２は全長10.2cm・先端部幅2.7cm・厚さ0.35cm、

3は現存長6.7㎝・先端部幅不明・厚さ0.3㎝、4は現存長7.5㎝・先端部幅不明・厚さ0.4㎝である。

5・6は有茎平根鏃で、5は先端部分のみであるが、現存長4.4㎝・身幅2.5㎜・厚さ0.35㎝である。6は腸抉三角形式であるが腸抉部が欠損しており、現存長5.2㎝・身幅4.0㎝・厚さ0.4㎝である。

刀子（第9図　7）

現存長4.8㎝ほとんどが欠損している。刀身の現存長1.0㎝・幅1.5㎝・峰部の厚さ0.2㎝である。柄部の現存長3.8㎝・直径1.7㎝・木製である。

須恵器

高杯（第9図　8）

口縁部・脚部の一部分を欠損しているが、無蓋長脚の長方形透しで、脚部中央に2本の沈線を巡らしている。口径11.7㎝、底部径11.4㎝、器高16.2㎝、杯部は斜方向に湾曲しながら伸び、口唇部は丸い。脚部は長方形透しを3ケ所（6個）施し、脚部端は平担である。胎土は2㎜前後の粒子を含み、焼成は良好である。

蓋杯（第10図　9～12）

9は口径15.0㎝、器高5.2㎝、天井は丸い。口縁部は比較的厚く、天井部にいくにしたががって厚くなっている。内外ともヨコナデ調整、胎土には2㎜前後の粒子を含み、焼成は良好である。

10は口径14.4㎝、器高4.5㎝、口縁部付近で掘曲しゆるい稜をつくる。口縁端部は丸い。口縁部は比較的薄く、天井部にいくにしたがって厚くなっている。内外ともヨコナデ調整であるが、内面天井部はたて方向のナデ調整である。胎土に2㎜前後の粒子を含み、焼成は良好である。

11は口径14.2㎝、器高4.1㎝、天井部と口縁部の境は甘く、緩やかに屈曲し、天井部は平担で直線のヘラ記号を有する。内外面ともヨコナデ調整、胎土には2㎜前後の粒子を含み、焼成は良好である。

12は口径14.0㎝、器高4.5㎝、天井部と口縁部の境は甘く、緩やかに屈曲している。口縁部は厚く、天井部にいくに従がってさらに厚くなっている。内外面ともヨコナデ調整、胎土に2㎜前後の粒子を含み、焼成は良好である。

杯（第10図　13～15）

13は口径13.0㎝、器高4.1㎝、立ちあがりは比較的長く内傾し、口唇部は尖っている。受け部との境に沈線を巡らしている。内外面ともヨコナデ調整、胎土に2㎜前後の粒子を含み

焼成は良好である。

14は口径12.6cm、器高4.5cm、立ちあがりは比較的高く内傾している。受け部との境に沈線を巡らしている。口縁部は薄く、端部は丸い。底部にはヘラ記号を有している。内外面ともヨコナデ調整、胎土に2mm前後の粒子を含み、焼成は良好である。

坩（第10図　17）

17は口径8.0cm、器高8.6cm、口唇部は尖っており、胴部は「く」字形で、中央上部で最も脹らみ底部にいたっている。内外面ともヨコナデ調整、胎土には2mm前後の粒子を含み、焼成は良好である。

土師器

蓋杯（第10図　16）

16は口径推定15.2cm、器高3.9cm、全体の2分の1程が欠損している。天井部はやや平担で口縁部との境には陵を有する。口縁端部は丸く厚い。内外面には多量の鉄分が付着、外面には鉄鏃の破片が付着している。内外面ともヘラ磨き調整、胎土は細かく焼成は良好である。

碗（第10図　18、19）

18は口径16.4cm、器高推定6.2cm、丸底の底部でゆるやかに内湾しながら立ちあがり口縁部に至っている。口唇部は丸い。内外面ともヘラ磨き調整、胎土は細かく焼成は良好である。

19は口径8.8cm・器高6.6cm、丸底の底部から内湾しながら立ちあがり口縁部に至っている。口唇部は丸く厚い。内外面ともナデ調整、胎土はあらく焼成は不良である。

盌（第10図　20）

20は口径9cm・器高6.6cm、丸底の底部から半月状に内湾しながら立ちあがり口縁部に至っている。口唇部は丸い。内外とも丁寧なヘラ磨き調整、胎土は細かく焼成は良好である。

2.　地下式第2号墳

(1)　内部構造

玄室は主軸線に沿って変形の長方形状を呈し、北27.5°東の方向に向いており、羨道を南の方にして構築されている。

また玄室の形態は東側両隅のうち、両側は角張っているが、北側の隅は丸みをおびている。そして西側の両隅はかなりひずみを生じ丸くなっている。地表面から玄室の床面までは1.95mあり、羨道は西側に片寄って開口し、P字形の形態をしている。

主体部は東側の壁面に沿って施され、そこの被葬者を囲むように長方形状に9ケの立石(20cm～28cm）が納置してあった。

玄室は奥行（中央）2.05m、幅（中央）1.79m、それに高さ65cmを計測することができたが、玄室の内部には上記の石囲み主体部以外、何らの遺構も認められなかった。

天井部はややドーム型の平天井様式を呈していた。羨道は長さ約50cm、幅60cm、それに高さ54cmとなっていた。

なおこの地下式2号墳の主体部である長方形状石囲み遺構は長さ1.9m、幅55cmの規模のものである。

(2) 出土遺物

玄室東側の長方形石囲み遺構内には南端に頭蓋骨を納置された伸展葬の人骨が斜めに葬られていた。

なお1号墳の玄室内西北部、壁面近くの敷石の上にも不完全なものではあるが、3個の頭蓋骨が納置されていた。

またこの遺構の中ほどに小刀1振（長さ2.5cm、幅2cm）と鉄鏃3本（長さ6cm～7cm）などが埋納されていたが、そのほかには土器類など全く副葬されていなかった。

3. 地下式第3号墳

(1) 内部構造

内部形態は第2号墳に極めてよく類似している。主軸線の方向は北17.5°東になっているが、羨道が南側に開口している。地表面から玄室の床面までは1.95mを計測することができた。

玄室内部の東側に主体部がおかれていたことにより、東側両隅は角張っているが、西側の両隅は円形状を呈している。

主体部が玄室の東側に限定されたことにより玄室の西側床面上には何らの遺構・遺物も認められなかった。

埋葬主体部は2号墳同様、長方形状の石囲み遺構で内部の長さ1.75m、幅（中央部）65cmとなっているが、この遺構は東側が玄室壁面、西側は25cm～30cmの立石を一列に並べ、北側に約40cmの自然石、また南側には約60cm長の大石でコ字形の石囲みとなっている。そして被葬者はその遺構の南側に埋葬されていたようである。

さらに内部の床面には長さ20cm～25cmの平石を敷き詰め、その上に被葬者を葬り、副葬品も納置してあった。

玄室は奥行（中央部）2.23m、幅（中央部）2.15m、それに高さ83cmを計ることができる。

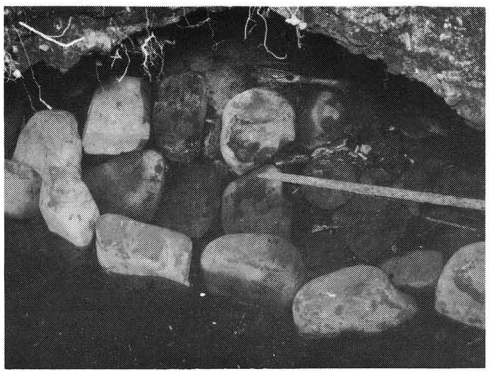
玄室の天井部は大部分崩壊しており、羨道側に約60cm遺存しているのみであったが、その遺っていた天井部分の中央には大棟の遺構とみなされる突出遺構が施され、また東西の両側

壁には屋根型の軒先と推定される遺構も確認された。

天井部から下への突出遺構は長さ6㎝、先端の幅4㎝、また軒先を表現する有段の入れ込みは3㎝を計測することができる。

なお羨道の長さは60㎝、幅65㎝、それに高さ64㎝となっているが、羨門の位置には25㎝～30㎝の丸石が7個閉塞石として納置されてあった。

第3号墳周辺



第3号墳の玄室内部

(2) 出土遺物

遺物は直刀をはじめ計7点が出土している。内訳は直刀1点、鉄鏃・鉄鏃片6点である。

直刀（第11図　21）

玄室右袖部に副葬されていたもので、現存長99㎝・身幅は中央部で3.2㎝、峰部の厚さ0.6～0.8㎝である。

刀身は平造りであるが、表面の剝離が進み、刃部も欠損が多く銹化著しい。

鉄鏃（第12図　25～27）

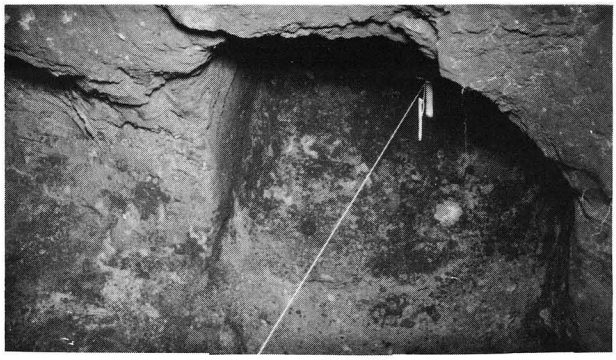
25はノミ頭式の有茎平根鏃で、全長13.2㎝、先端部幅2.7㎝、厚さ0.2㎝である。26・27は刀型の有茎細根鏃で、その他3点を加え計6点が出土している。2は現存長12.3㎝、身幅0.8㎝、厚さ0.3㎝、3は現存長11.9㎝、身幅0.6㎝、厚さ0.3㎝である。その他3点は数㎝程の残欠片である。

4. 地下式第４号墳

(1) 内部構造

内部形態としては長方形型系統の変形プランを呈し、玄室の奥行が狭くなるとともに相当にひずみを有する構造となっている。主軸線の方向は北44°東となっているが、羨道は西南方に開口している。

玄室は羨道が片方に寄った三角形状を呈するＰ字型の形態になっている。玄室の内部には何らの遺構も認められず、中央床面上に副葬品が１点埋納されてあっただけである。



第４号墳の羨道部

玄室の奥行は細長の先端部で2.36ｍ、それに幅1.8ｍ（中央部）を計ることができたが、高さは天井部の崩壊により明らかでない。

しかし天井部の形式はドーム様式と推定される。なお羨道の長さは60cm、幅・羨門部で65cm、玄門部で70cm、そして高さは80cmとなっている。

(2) 出土遺物

遺物は鉄剣片６点のみである。

鉄剣（第11図　24）

玄室中央部に副葬されていたものである。全長は欠損により不明、中央部幅3.2cm、厚さ0.6cmである。

刀部は欠損が多く、銹化著しい。表面には鉄鏃の残欠片と鞘の木質が付着している。また、刃部は鍋はなく断面凸レンズ状で、わずかな抉りをもち茎に移行している。

茎は長さ12.8cm、中央部幅1.5cm、厚さ0.5cmで目釘穴が残っている。

5. 地下式第５号墳

(1) 内部構造

今回の元地原地下式墳墓群の中では唯一の長方形の玄室形態を呈し、羨道が短軸の中央部に付着する妻入形の玄室である。

しかし正長方形式ではなく、奥壁に進むに従い両側が多少狭くなる。そして四隅ともに角

張った長梯形型を呈する内部構造になっている。

方向は主軸線に沿って北23°東になっているが、羨道は南側に開口している。

玄室は奥行2.45m、幅（中央）1.55m、それに天井部の高さ1.1mを計測できた。埋葬主体部は玄室の東側に片寄っており、しかも被葬者を取り囲むように立石が東側に沿ってコ字型に納置してあった。

右第4号墳と左第5号墳

3号墳の主体部を囲むコ字型立石の長方形遺構の場合は、コ字型が東側壁の方を向いて方形状主体部を形成していたが、この5号墳の長方形コ字型立石は玄室中央床面の方が開いていて副葬品が中央部分にも埋葬されていた。なお、東側壁には全面に朱の塗布が認められた。

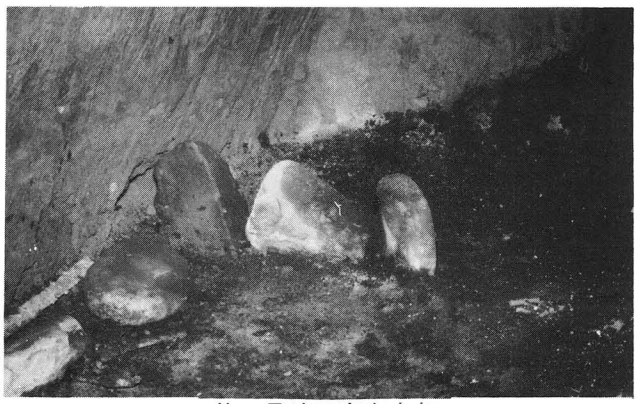
玄室は床面から上へ壁面に沿って約70cmの地点で段状の入り込みが施されて軒先状を呈し、切妻様式の屋根型の形態となっていた。

この玄室の天井部は全面にわたり崩壊し、軽うじて玄門の部分のみ天井部が残存していたので、それによって玄室の断面を認知することができた。

なお5号墳で興味深いことは、竪穴の奥壁に2箇所掘り込みの踏段が設けられていたことである。竪穴は地表面から床面まで約1.2mあり、しかもほとんど垂直になっているので中途に足掛りが必要になったものと思われる。

上部の踏段は、当時の表土から43cm下に18cmの幅（中間部）で長さ19cmにつくられ、その踏段は上部が浅く下方は深さ13cmとなっていたが、さらにその下方にも46cm下った所に17cm幅（中間部）で長さ25cm、深さ11cmの踏段がもう1箇所設けられていた。

玄室は奥行2.45m、幅（中央部）1.5m、それに天井部の高さ1.1mを計ることができた。また羨道は断面が方形状を呈していたが、計測値は長さ47cm、幅（中央部）62cm、それに高さ60cmとなっていた。



第5号墳の玄室内部

(2) 出土遺物

遺物は直刀をはじめ計55点が出土している。内訳は直刀・直刀片８点、刀子・刀子片３点、鉄鏃・鉄鏃片27点、鉄片３点、須恵器片１点、管玉９点、鉄製鋤先１点、鉄斧３点である。

直刀（第11図　22・第13図　44、45）

22は玄室東南奥に副葬されていたものである。現存長81.7cm、身幅は中央部で3.7cm、峰部の厚さ0.5cmである。刀身は平造りであるが、剝離化が進んでおり、刃部もかなり欠損している。

44・45とも刀身の一部分である。44は現存長26.2cm、幅3.0cm、峰部の厚さ不明、45は現存長10.3cm、幅2.0cm、峰部の厚さ0.3cm、どちらも平造りであるが、表面の剝離が進み銹化著しい。

鉄鏃（第12図　28～40）

玄室東南角隅に重って出土している。28～39は有茎細根鏃で、その他13点を加え計26点が出土しているが、刀型８点、不明18点である。40は腸抉長三角形式であるが、腸抉部が欠損している。

各部の計測は表１のとおりである。

表１　鉄鏃計測表　　単位：cm

図面番号	現存長	身幅	厚み	矢柄の残存	備考
12図－28	12.8	0.9	0.4	木質付着	ほぼ完形
〃－29	9.1	0.8	0.4		茎部欠損
〃－30	8.4	0.7	0.5		〃
〃－31	10.0	0.8	0.5		刀身部欠損
〃－32	6.7	0.7	0.5		茎部欠損
〃－33	7.3	0.9	—		〃
〃－34	7.1	0.8	0.4		〃
〃－35	8.5	0.7	0.6		
〃－36	7.4	—	—	木質付着	
〃－37	7.7	—	—	〃	
〃－38	7.0	—	—		
〃－39	13.7	0.7	0.4	木質付着	刀身部欠損
〃－40	5.7	2.5	1.1		

刀子（第12図　41～43）

玄室内より完形を含め計３点が出土している。41は現存長15.7cm、刀身部中央幅1.3cm、峰部の厚さ0.4cm、刀身にはほとんど反りはみられない。柄部は6.7cm、中央幅2.0cm、厚

さ 1.1 cm、木製であるが腐食がはげしい。

42・43は刀身しか残っていない。42は現存長 7.0 cm、中央部幅 1.7 cm、峰部の厚さ0.35cm、ほとんど反りはみられない。43は現存長11.6cm、中央部幅 1.6 cm、峰部の厚さ 0.3 cm、42と同様ほとんど反りはみられない。

甕（第13図　46）

竪穴から出土したもので、唯一の土器片である。甕の胴部と思われるが、表は叩き目、裏は同円心の青海波文である。

管玉（第13図　47～56）

玄室、玄門寄りでかたまって計10個出土している。ほとんど完形、碧玉製の管玉である。各部の計測は表２のとおりである。

表２　管玉計測表　　単位：cm

図面番号	高さ(長さ)	幅	色　調	石　材	備　考
13図－47	2.2	0.75	明縁灰	碧　玉	$\frac{1}{3}$程欠損
〃　－48	2.0	0.85	淡縁色	〃	
〃　－49	2.6	0.85	〃	〃	
〃　－50	2.9	0.95	〃	〃	
〃　－51	2.6	0.95	〃	〃	
〃　－52	2.5	0.95	〃	〃	
〃　－53	2.3	0.85	〃	〃	
〃　－54	2.4	0.8	〃	〃	
〃　－55	2.4	0.9	〃	〃	
〃　－56	1.9	0.7	〃	〃	

鋤（鍬）先（第13図　57）

全長12.7cm、幅13.5cm、刃先の身幅 3.9 cmを測るＵ字型の鋤（鍬）先である。木台を挿入するための内縁をめぐるＶ字型の入りこみは、幅 1.1 cm、深さ 0.8 cmである。

完形ではあるが４つに折れ、刃部も欠損が多く銹化著しい。

鉄斧（第13図　58～60）

58・59・60とも無肩撥形の鉄斧である。58は現存長13.3cm、刃部幅 6.5 cmであるが、銹化のため厚く膨らみ亀裂が多い。刃部は欠損が多く、柄の挿入部には木質が残っている。59は現存長14.0cm、刃部幅 5.5 cm、刃部に欠損はあるが銹化による膨らみもなく、ほとんど現形のままである。柄の挿入部の深さ 5.3 cmである。60は小型で現存長11.3cm、刃部幅 5.7 cm、

60も59と同様、銹化が進み膨らみ・亀裂が多い。柄の挿入部は深さ5.2cmである。

6. 地下式第6号墳

(1) 内部構造

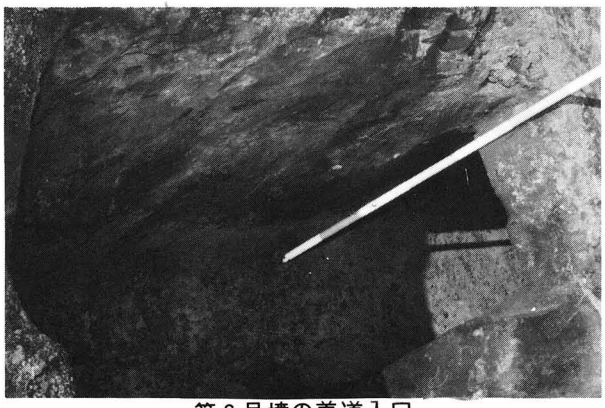
玄室の方向は主軸線に浴って北45°東を向いているが、羨道が玄室の西南側に開口する内部形態になっている。

玄室は長方形型変形様式の退化した先細長の三角形状P字型を呈し、羨道は短軸西側に片寄って開けており、玄室西側壁面と竪穴西側壁面は直線上の壁面となって連なっている。そして、玄室の天井部はわずかに湾曲したドーム様式の平天井となっている。

玄室の計測値は奥行2.2m、幅（中央部）1.35m、それに高さ72cmとなっているが、羨道は長さ70cm、幅（中央部）53cmを計ることができた。

竪穴部は長方形を呈し、上部で長さ1.63m、幅（中央部）93cm、そして底床面では長さ95cm、幅（中央部）60cmを計測できた。

またこの竪穴の奥壁にも5号墳と同様、壁面に縦に2箇所の踏段が遺存していた。地表面から玄室の床面までは約2mを計ることができた。



第6号墳の羨道入口

(2) 出土遺物

遺物は直刀1点のみである。

直刀（第11図　23）

玄室右袖部に副葬されていたもので、現存長69.6cm、刀身中央幅2.5cm、峰部の厚さ0.5cmである。柄部の茎は長さ5.2cm、中央部幅1.8cm、厚さ0.5cmで柄元から4.1cmのところに目釘穴が残存している。

刀身は64.4cm、平造りで鞘の木質が部分的に付着している。鞘は木質で鞘元・鞘尻の部分が残っている。鞘元の方は長さ23.7cm、幅4.2cm、厚さ1.3cm、片側のみ。鞘尻は長さ17.0cm、幅2.4cm、厚さ0.6cm、これも片側のみである。

7. 地下式第７号墳

(1) 内部構造

７号墳の方向は北2°東となっているが、羨道が南側に開口している。玄室は長方形プランの妻入切妻型の形式であるが、奥壁西側の角隅が円曲線を描いているので、長方形型でも変形プランを呈している。

玄室内部には立石など何らの施設も施されていない。玄室は奥行 2.1ｍ、幅（中央）1.2mと小規模になっている。

そして高さは天井部が崩壊しているので正確に計測することができないが、玄門の地点で約65cm、奥壁付近では45cmを計ることができた。なお玄室床面は羨道の方から奥壁の方へ少し下っているが、羨道は玄室の短軸中央部より西側に寄って開口している。

羨道は長さ45cm、幅（中央）53cmとなっているが、高さは天井部崩壊のため明らかでない。

(2) 出土遺物

遺物は多数の小玉をはじめ計72点が出土している。内訳は鉄製品２点、鉄鏃１点、小玉69点である。

鉄製品（第14図　61、62）

玄室中央玄門寄りに副葬されていたもので、１は半円状、断面は楕円形、幅 0.4 cmである。

鉄鏃（第14図　63）

刀型の有茎細根鏃で、現存長12.0cm、身幅 0.9 cm、厚さ 0.2 cmである。

小玉（第14図　64～83）

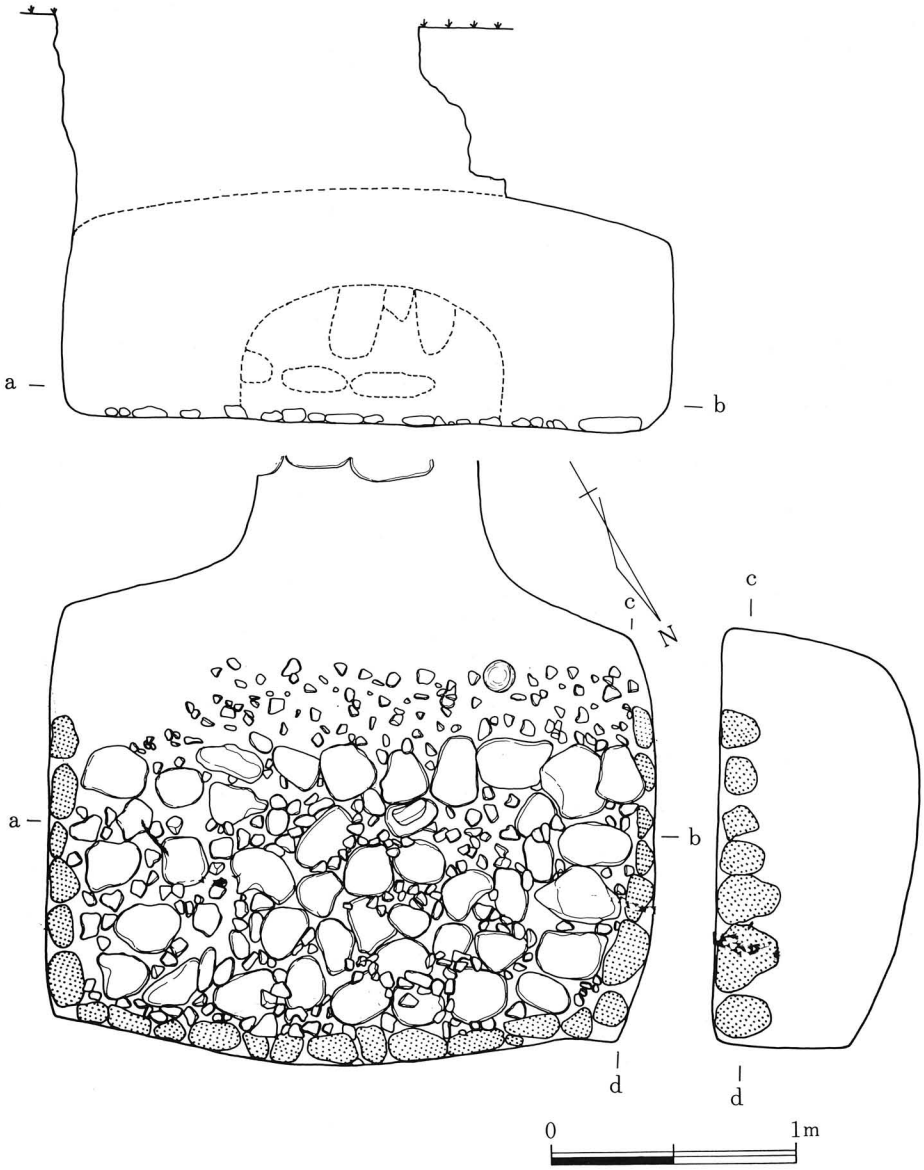
玄室中央部より散乱して69点が出土している。

各部の計測は表３のとおりである。

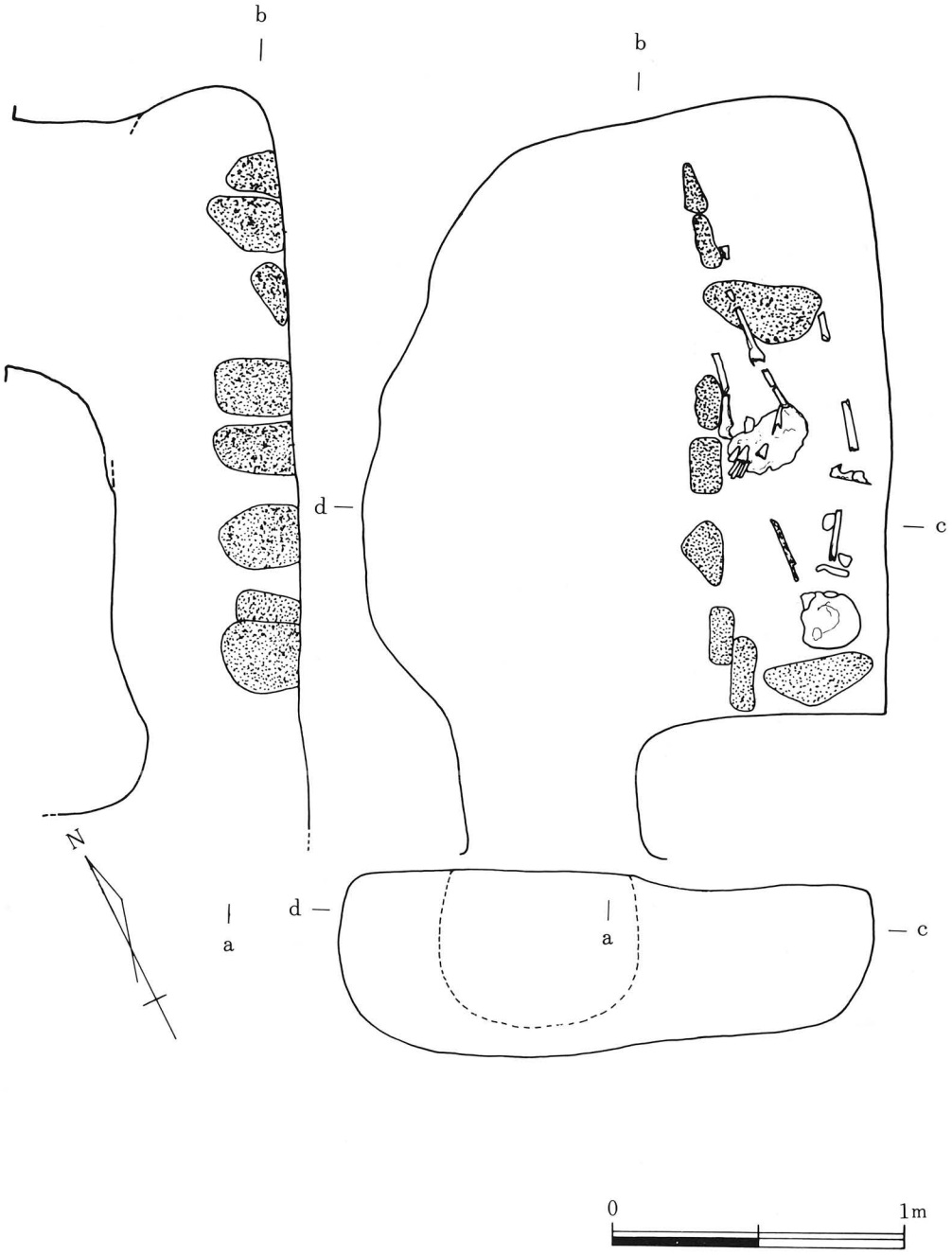
表3　小玉計測表

単位：cm

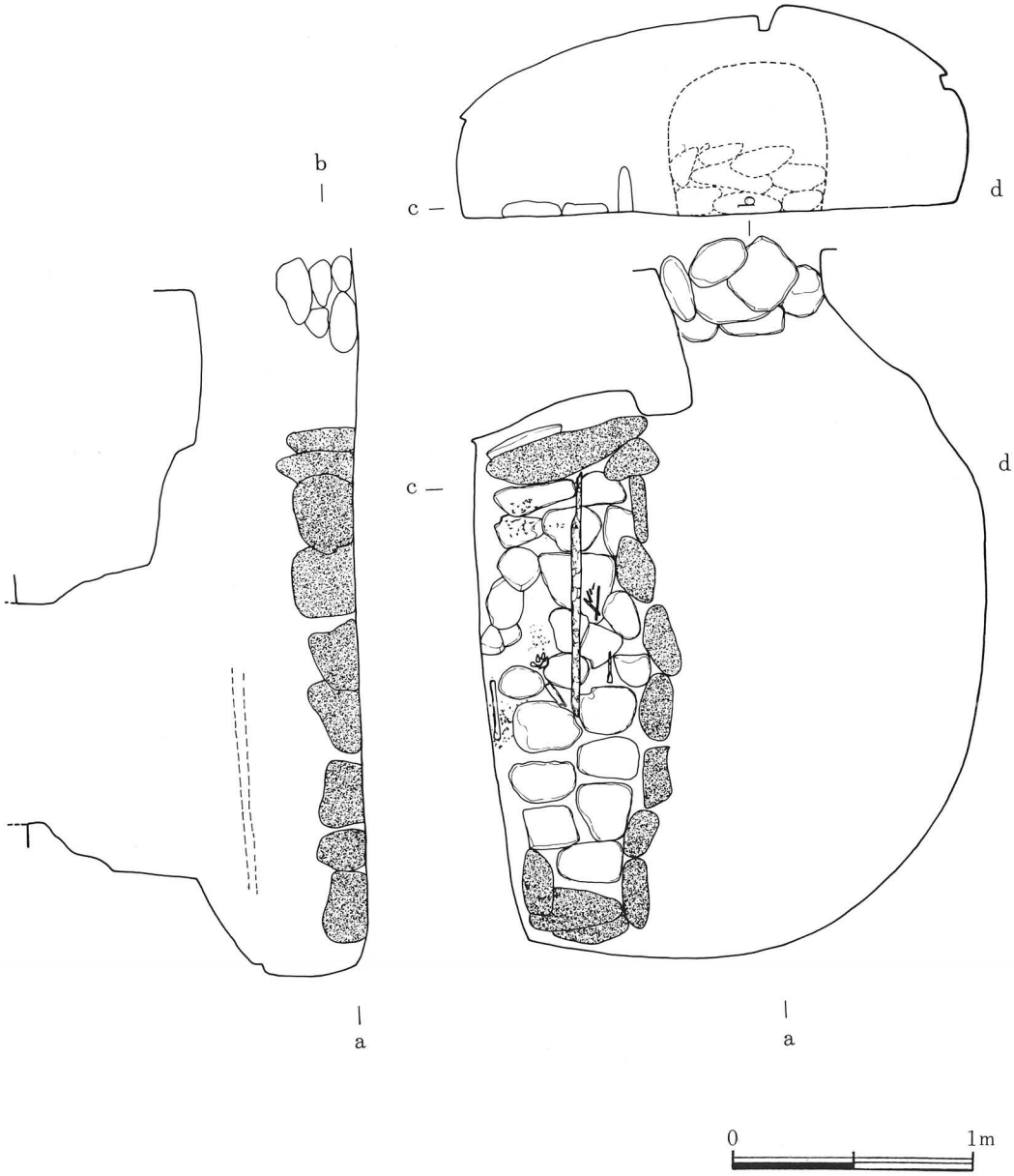
番号	高さ(長さ)	幅	色調	石材	備考	番号	高さ(長さ)	幅	色調	石材	備考
1	0.25	0.4	藍色	ガラス質	第14図－64	36	0.3	0.4	藍色	ガラス質	
2	0.3	0.45	〃	〃	〃 －65	37	0.25	0.5	〃	〃	
3	0.25	0.5	〃	〃	〃 －66	38	0.25	0.45	〃	〃	
4	0.3	0.5	淡藍色	〃	〃 －67	39	0.25	0.4	〃	〃	
5	0.3	0.55	〃	〃	〃 －68	40	0.3	0.35	〃	〃	
6	0.4	0.5	淡暗緑色	〃	〃 －69	41	0.25	0.45	淡藍色	〃	
7	0.35	0.45	藍色	〃	〃 －70	42	0.2	0.45	〃	〃	
8	0.3	0.5	淡藍色	〃	〃 －71	43	0.35	0.45	〃	〃	
9	0.4	0.4	藍色	〃	〃 －72	44	0.3	0.5	〃	〃	
10	0.4	0.45	〃	〃	〃 －73	45	0.3	0.4	〃	〃	
11	0.3	0.45	淡藍色	〃	〃 －74	46	0.3	0.45	〃	〃	
12	0.35	0.55	淡暗緑色	〃	〃 －75	47	0.3	0.4	〃	〃	
13	0.35	0.5	〃	〃	〃 －76	48	0.25	0.4	〃	〃	
14	0.2	0.45	淡色	〃	〃 －77	49	0.25	0.4	〃	〃	
15	0.25	0.35	〃	〃	〃 －78	50	0.35	0.4	〃	〃	
16	0.2	0.4	淡藍色	〃	〃 －79	51	0.35	0.4	〃	〃	
17	0.25	0.45	〃	〃	〃 －80	52	0.3	0.4	〃	〃	
18	0.25	0.45	〃	〃	〃 －81	53	0.3	0.45	淡暗緑色	〃	
19	0.3	0.5	〃	〃	〃 －82	54	0.15	0.4	〃	〃	
20	0.4	0.4	〃	〃	〃 －83	55	0.3	0.4	〃	〃	
21	0.3	0.5	藍色	〃		56	0.2	0.4	〃	〃	
22	0.35	0.4	〃	〃		57	0.35	0.45	〃	〃	
23	0.35	0.4	〃	〃		58	0.2	0.4	〃	〃	
24	0.25	0.45	〃	〃		59	0.3	0.4	〃	〃	
25	0.25	0.45	〃	〃		60	0.2	0.4	〃	〃	
26	0.25	0.4	〃	〃		61	0.25	0.35	〃	〃	
27	0.35	0.4	〃	〃		62	0.35	0.4	〃	〃	
28	0.3	0.5	〃	〃		63	0.4	0.3	〃	〃	
29	0.25	0.45	〃	〃		64	0.25	0.4	〃	〃	
30	0.4	0.35	〃	〃		65	0.2	0.4	〃	〃	
31	0.3	0.4	〃	〃		66	0.2	0.4	〃	〃	
32	0.25	0.4	〃	〃		67	0.2	0.4	〃	〃	
33	0.35	0.35	〃	〃		68	0.2	0.35	〃	〃	
34	0.4	0.4	〃	〃		69	0.2	0.35	〃	〃	
35	0.4	0.4	〃	〃							



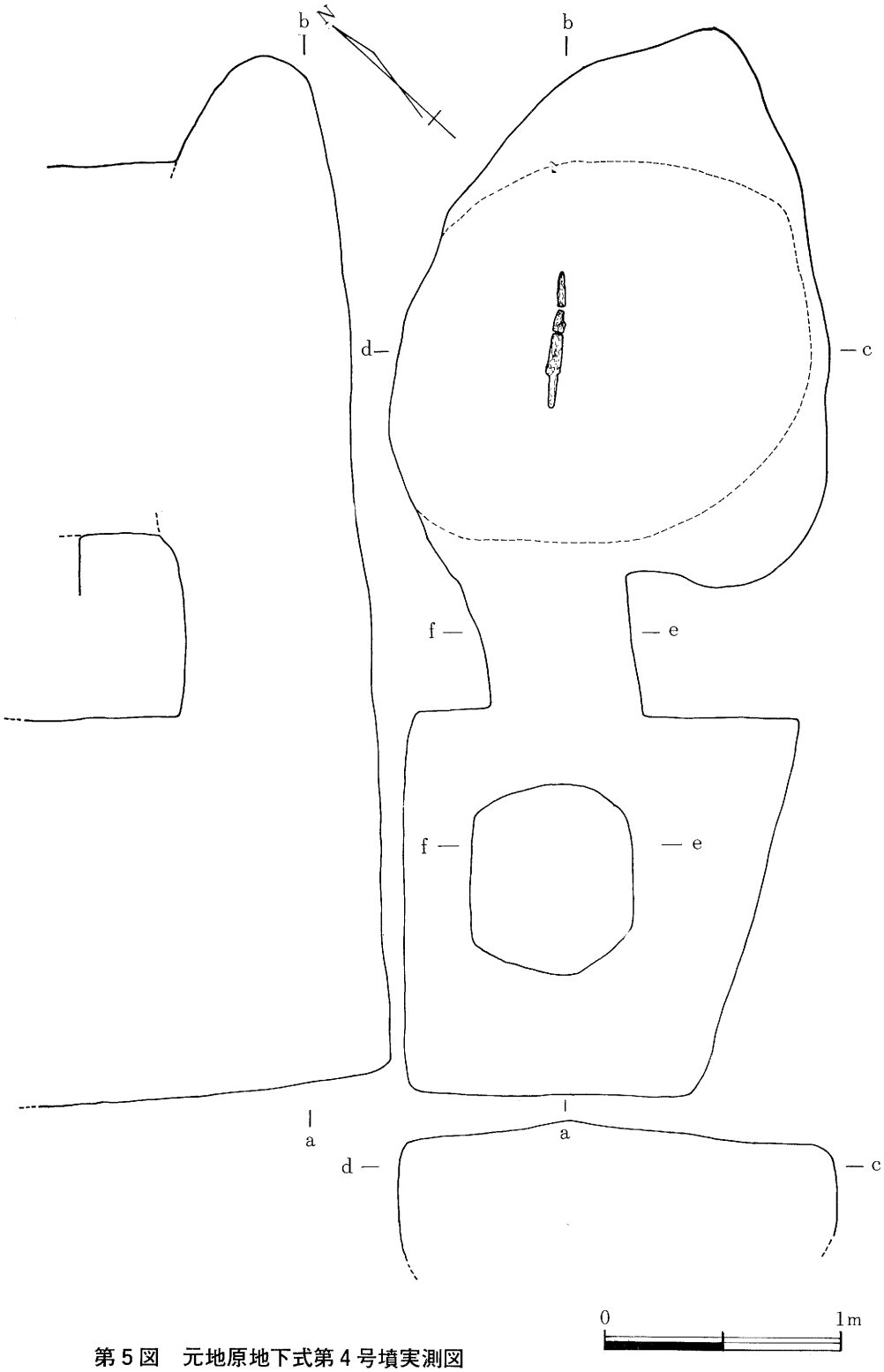
第２図　元地原地下式第１号墳実測図



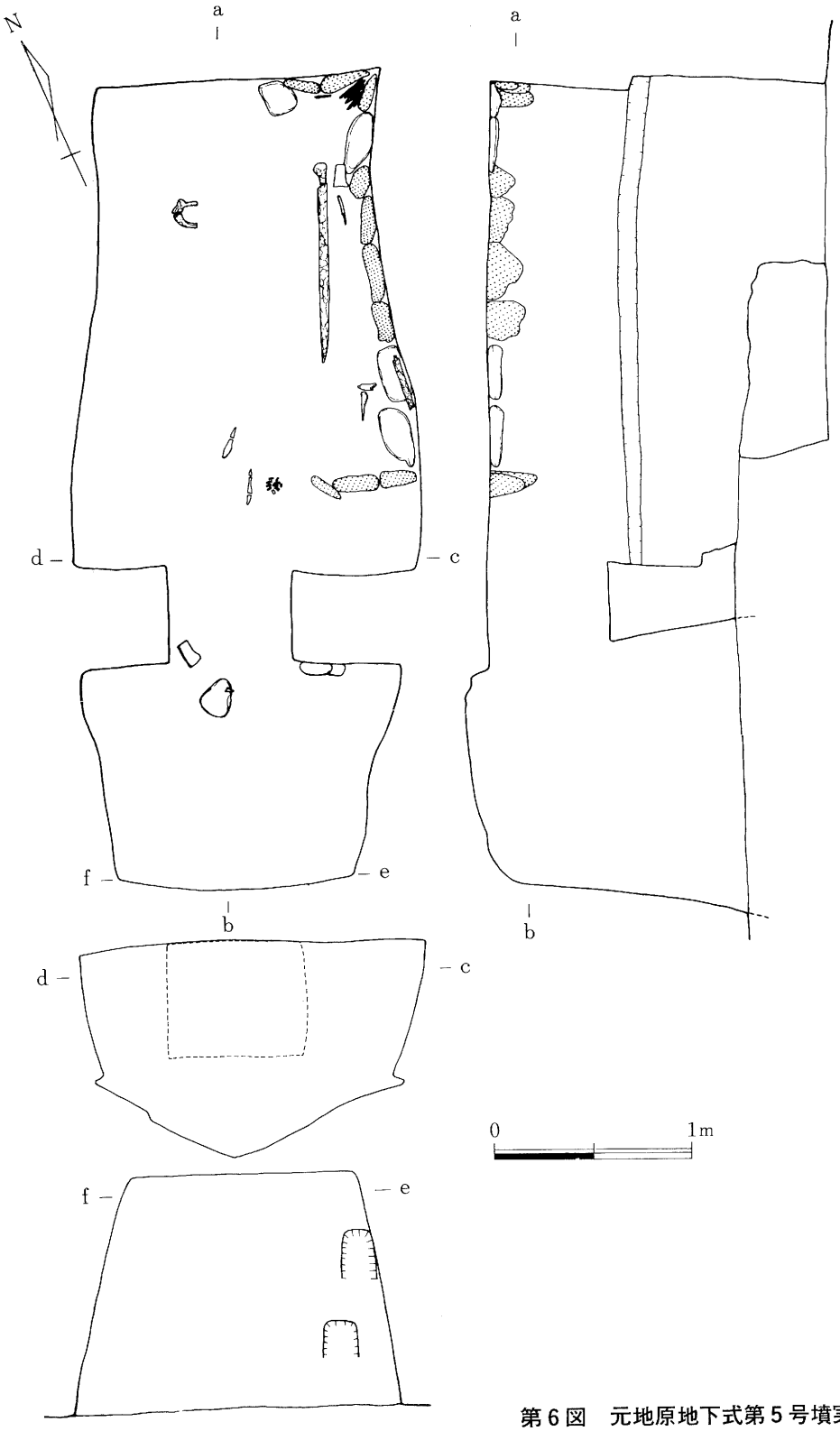
第3図　元地原地下式第2号墳実測図



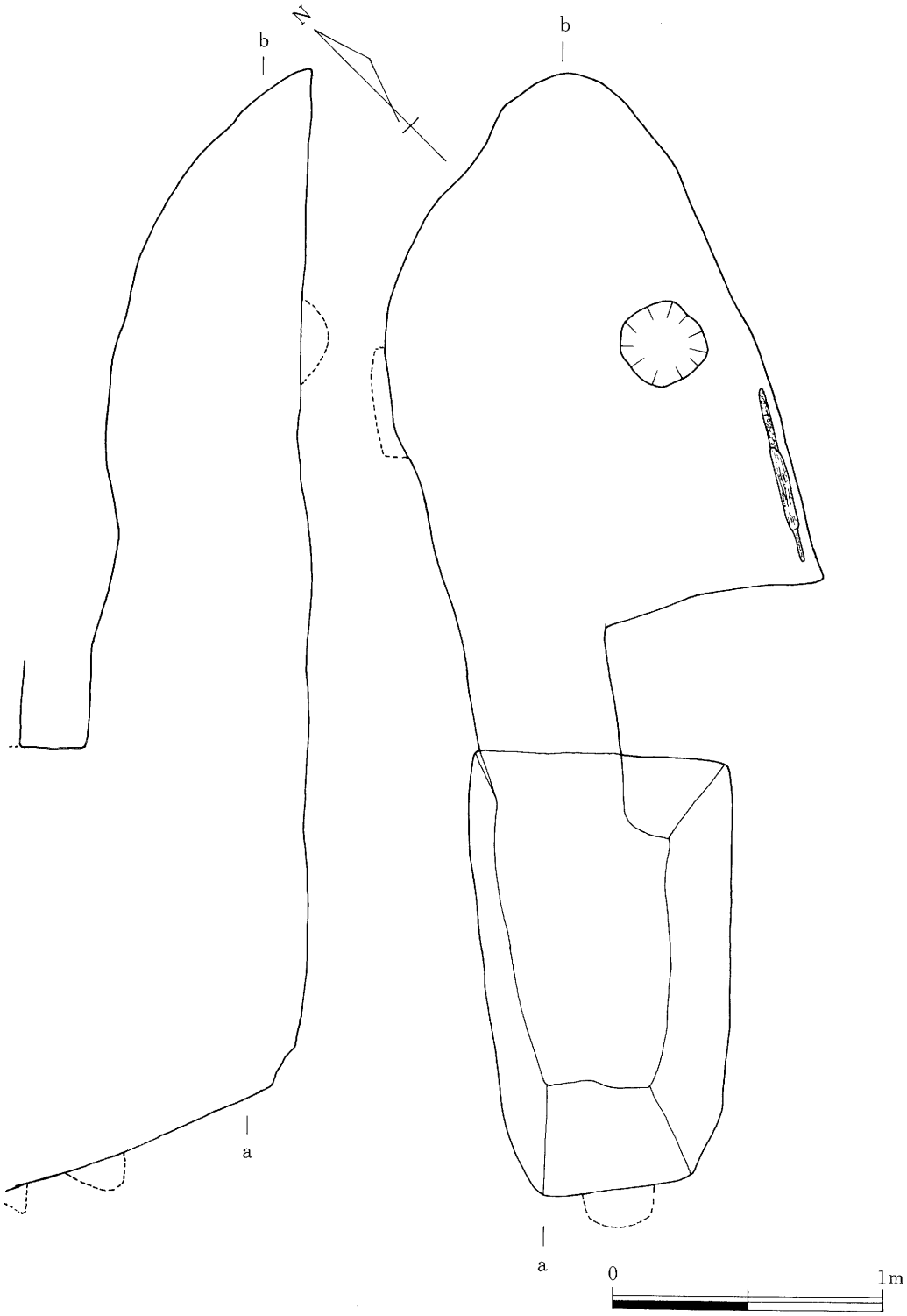
第4図　元地原地下式第3号墳実測図



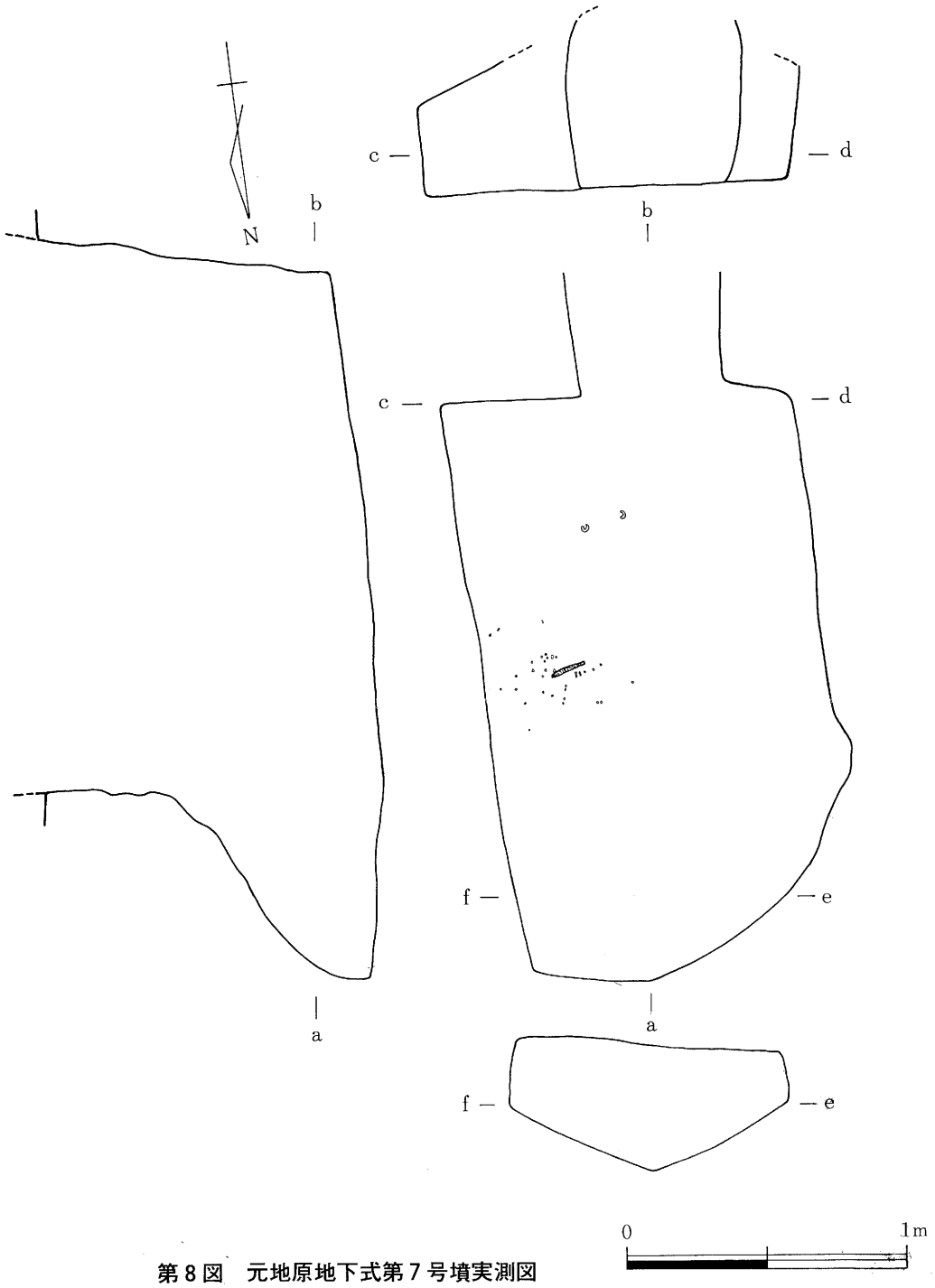
第５図　元地原地下式第４号墳実測図



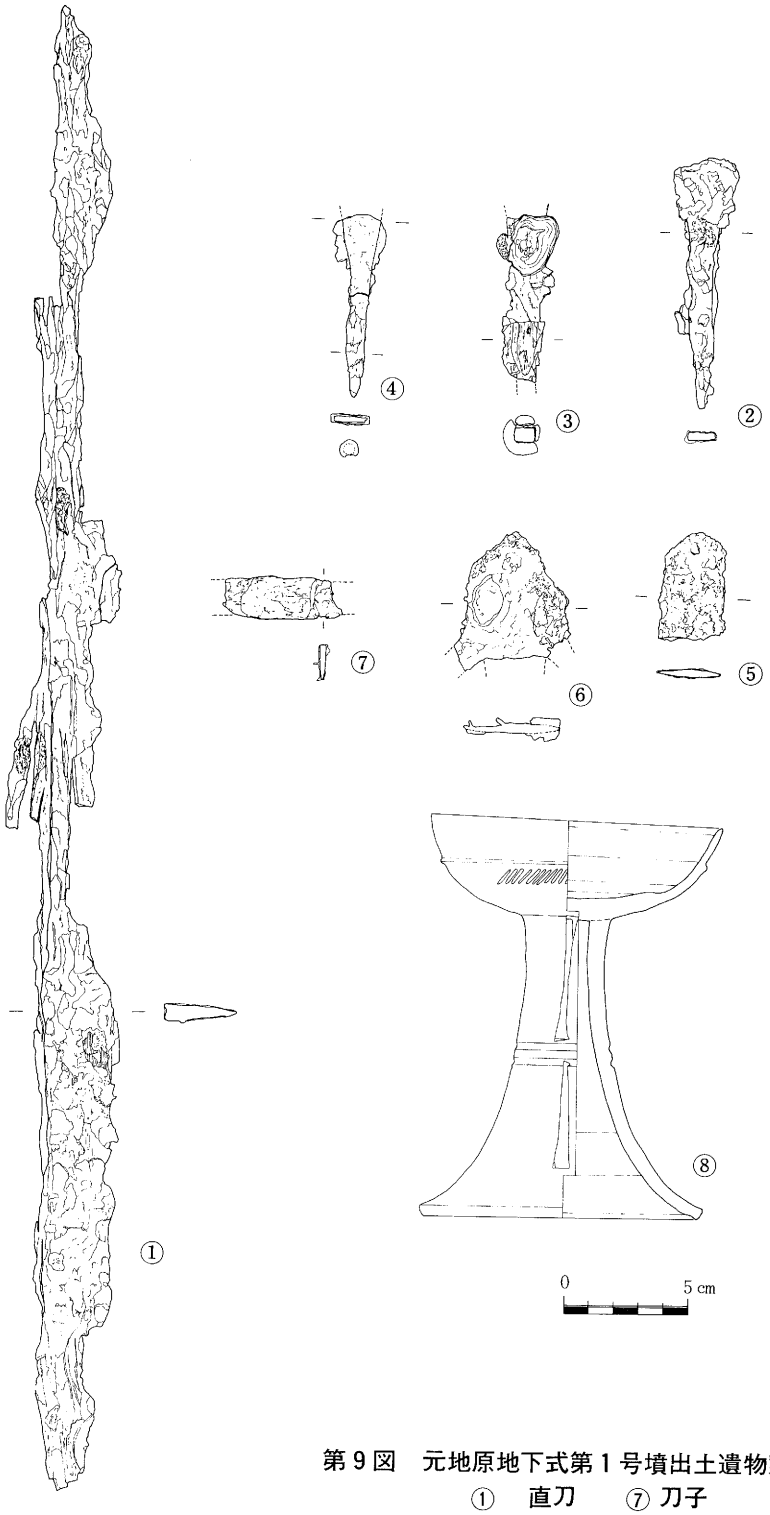
第6図　元地原地下式第5号墳実測図



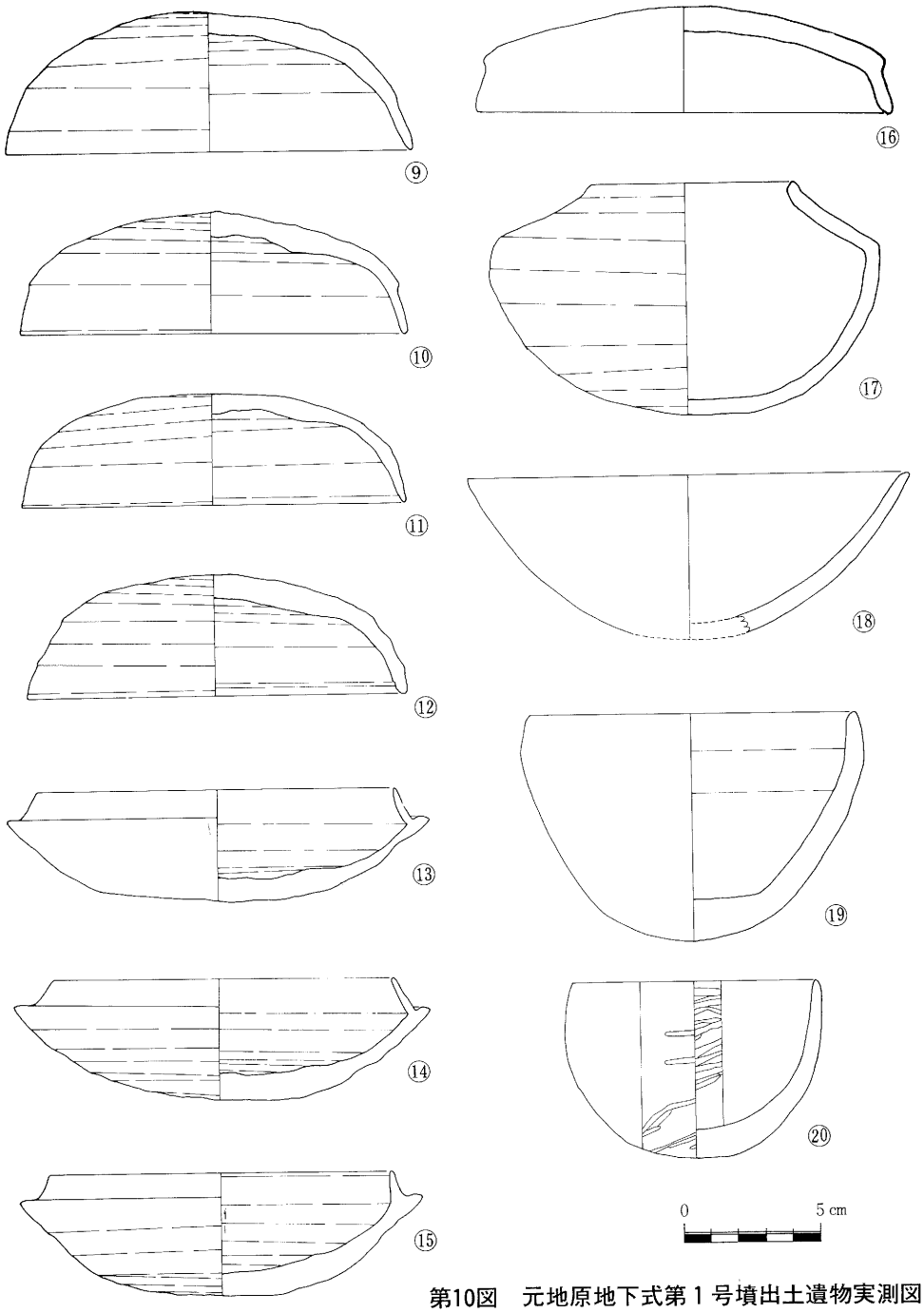
第7図　元地原地下式第6号墳実測図



第8図　元地原地下式第7号墳実測図

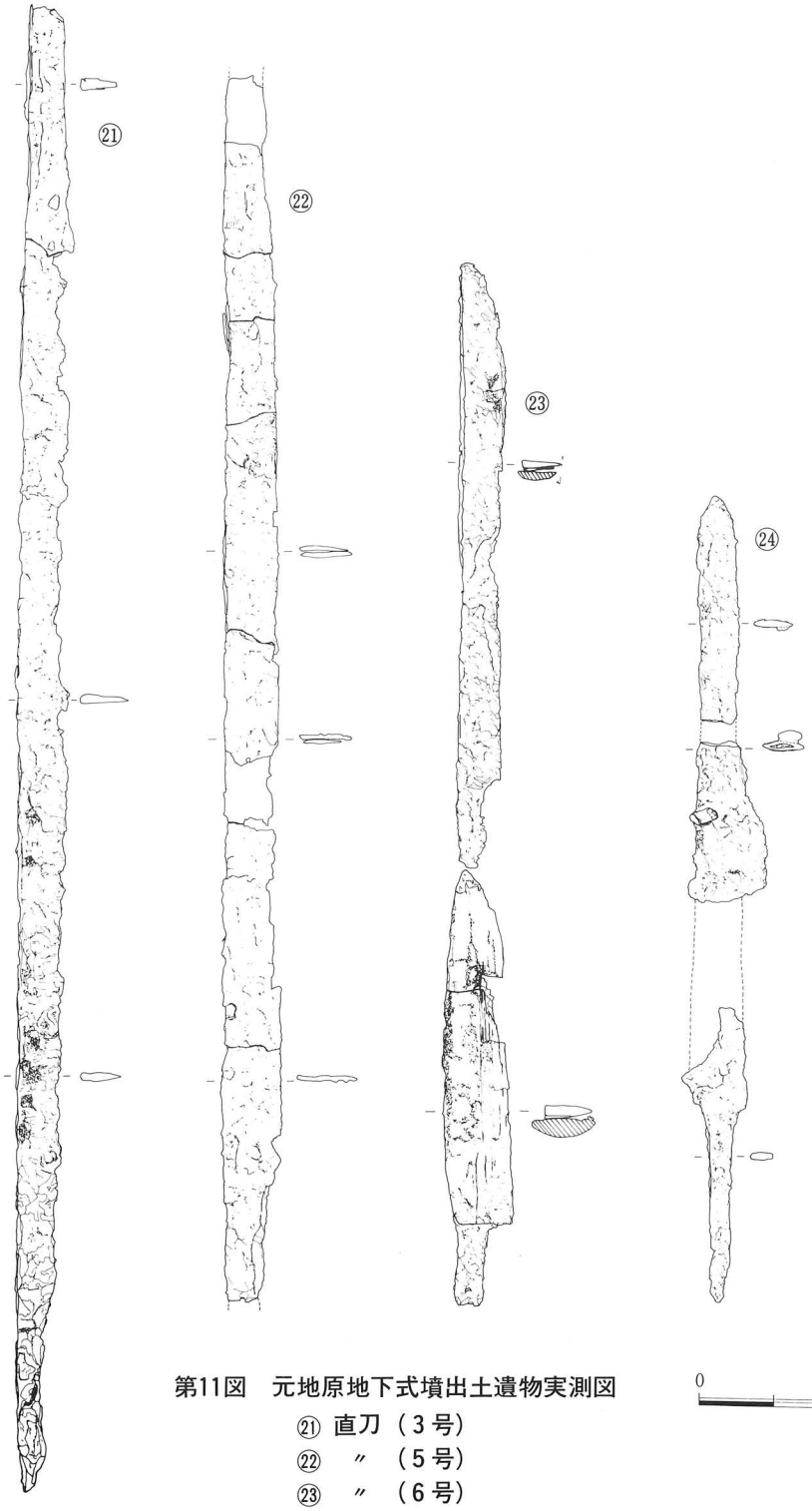


第９図　元地原地下式第１号墳出土遺物実測図
①　直刀　⑦ 刀子
②～⑥ 鉄鏃　⑧ 高杯



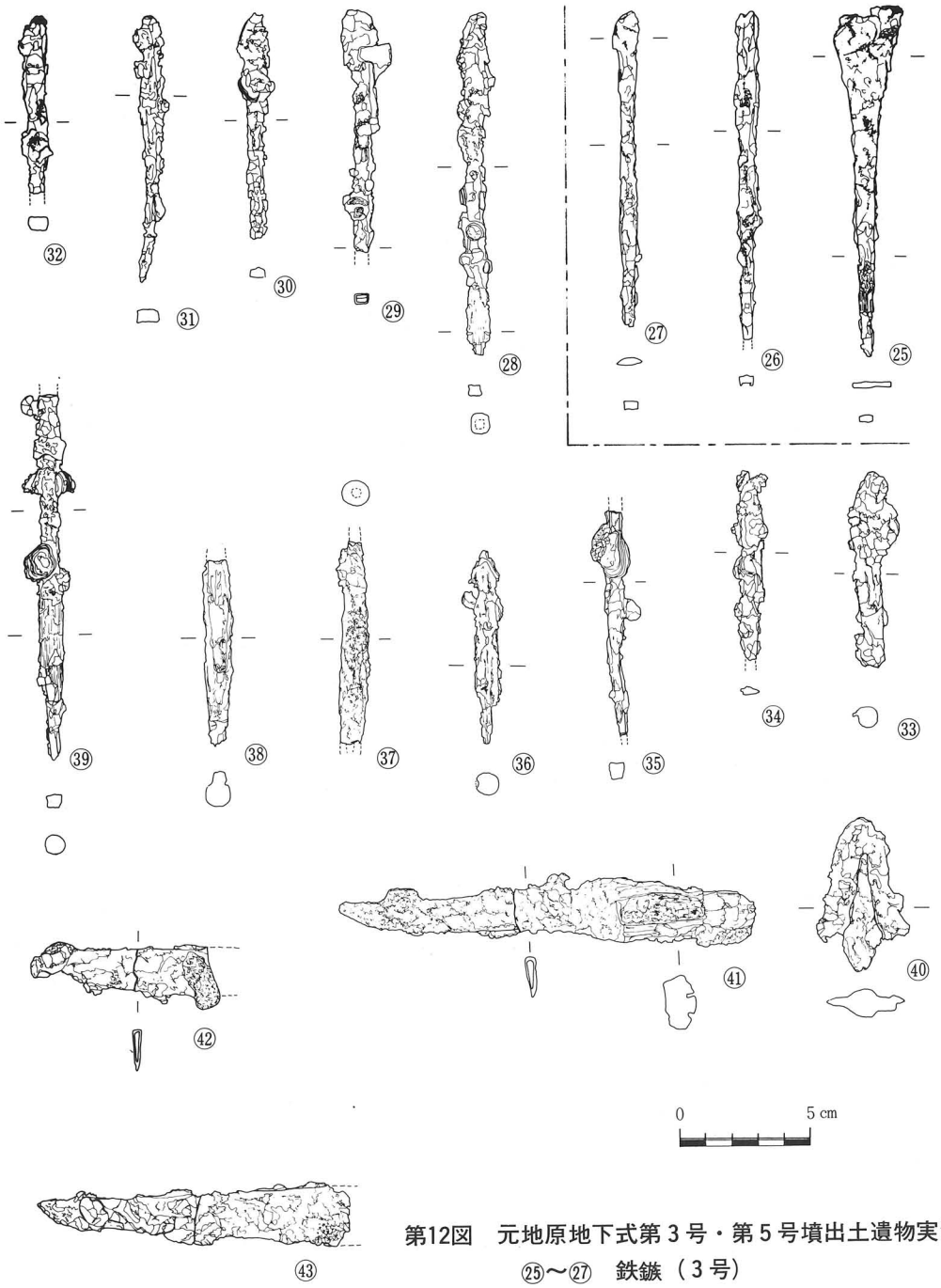
第10図　元地原地下式第１号墳出土遺物実測図

⑨～⑫ 蓋杯（須恵器）　⑰ 坩（須恵器）
⑬～⑮ 杯（　〃　）　⑱ 碗（土師器）
⑯ 蓋杯（土師器）　⑲ 碗（　〃　）
⑳ 盌（　〃　）



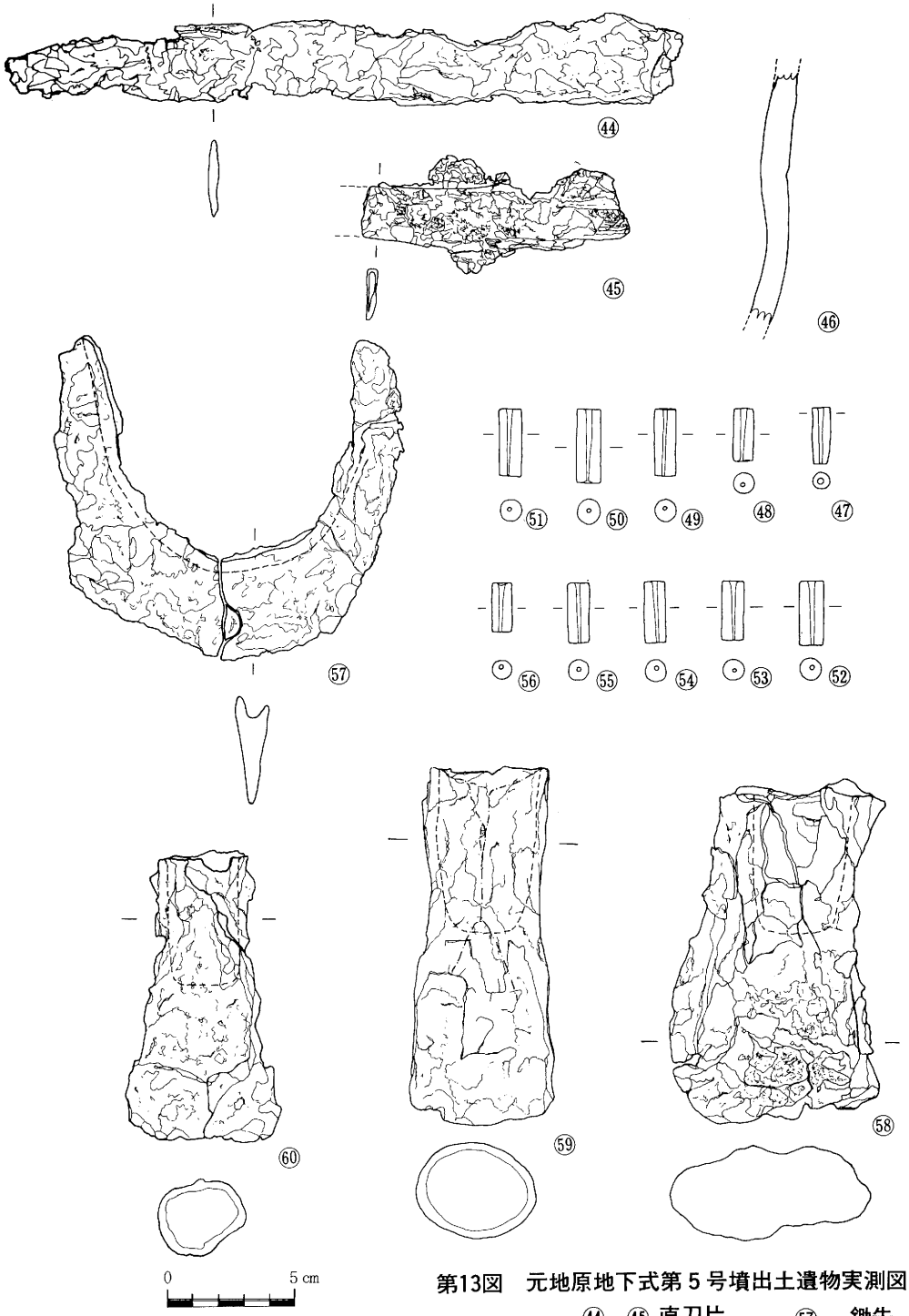
第11図　元地原地下式墳出土遺物実測図

㉑ 直刀（3号）
㉒ 〃（5号）
㉓ 〃（6号）
㉔ 鉄剣（4号）



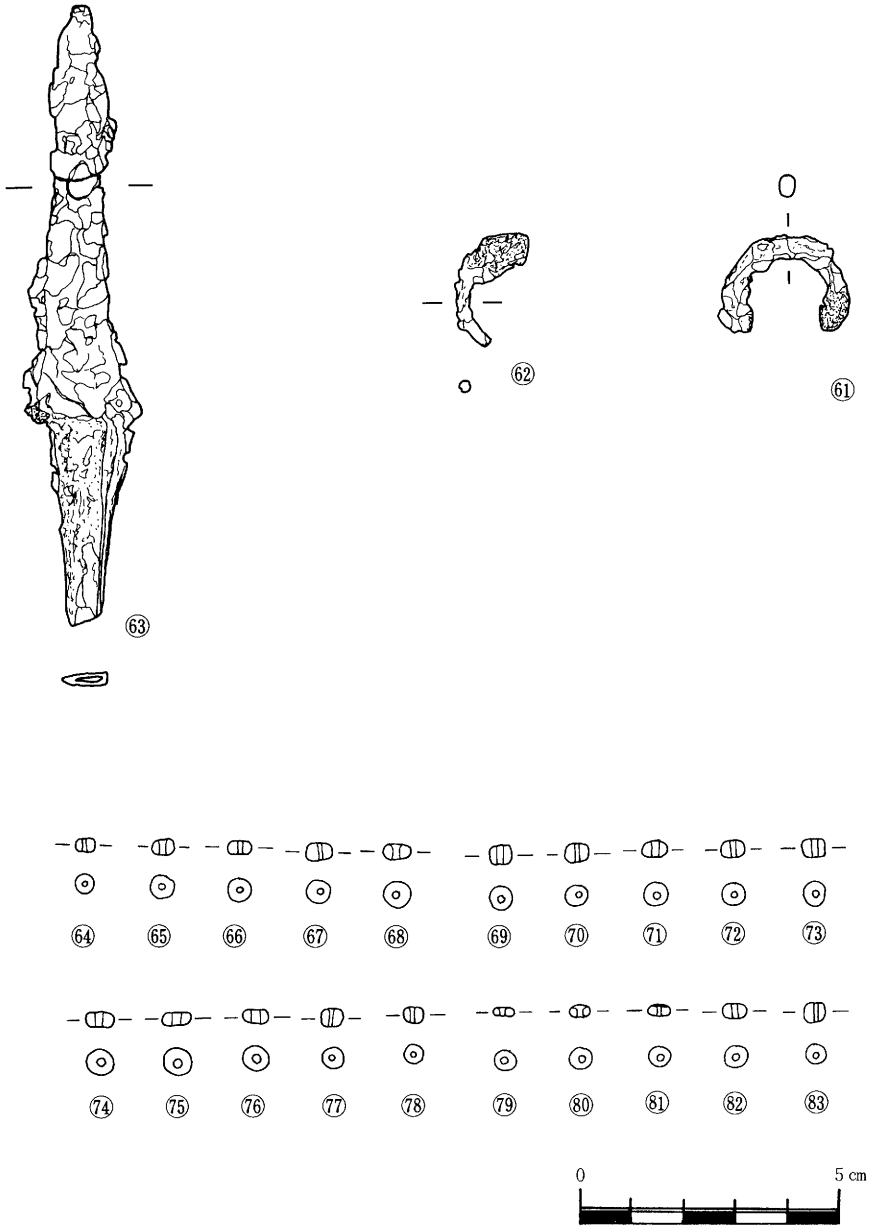
第12図　元地原地下式第３号・第５号墳出土遺物実測図

㉕～㉗　鉄鏃（３号）
㉘～㊵　〃　（５号）
㊶～㊸　刀子（５号）



第13図　元地原地下式第５号墳出土遺物実測図

㊹ ㊺ 直刀片　　㊼ 鋤先
㊻ 須恵器片　　㊽～㊿ 鉄斧
(47)～(56) 管玉



第14図　元地原地下式第７号墳出土遺物実測図

⑥1 ⑥2　リング状鉄製品
⑥3　鉄鏃
⑥4～⑧3　小玉

Ⅳ まとめ

元地原地下式墳墓群の７基につき、以上論述してきたが、国富町八代の薩摩原台地上では始めての地下式墳の発見であり、しかも、この墳墓群が内部構造の面から系統的に考察できることがその特色といえそうである。

１号地下式墳を除く２号地下式墳から７号地下式墳までの６基は系列的に形式づけられることで関心をそそられるが、特に内部形態が長方形玄室から変形プランに変化してゆく過程をたどることができる。

また、玄室内での主体部の位置にしても特性があって興味深い。さらに主体部を囲む立石遺構とその形態も、この元地原墳墓群の特殊性といわなければならない。

なお副葬品にしても、１時期おくれる１号地下式墳を除くと５号地下式墳の竪穴部から須恵器片が１点確認された以外は土器類の出土をみなかった。

次に、この元地原地下式墳墓群の類型的な形式分類を試みてみたいと思う。

まず前述した５号地下式墳であるが、この墳墓はこのたびの元地原発見の７基の中では、多少ひずみを有しており、妻入切妻型の長方形プランから変化して長梯形型を呈している。

そして形態的にみて、この元地原地下式墳墓群の中では最初の時期に比定することができる。

しかし内部構造の側面からみて、羨道部が玄室の短軸中央部ではなく、少し西側に寄っていること、さらに埋葬主体部が玄室の東側に寄り、立石で囲まれていることなど、古式の長方形プラン様式から変化を来してはいるが、玄室東側壁面に朱を塗付していることなどは、まだ古式長方形型地下式墳の伝統が遺存しているとみなしてもよかろう。そこでこの５号地下式墳を類型的に「元地原第一形式」と名称ずけることにする。

次に、７号地下式墳は玄室の長方形プランがさらに変化し、その北西部の角隅は円曲化し始める。そして天井部も切妻様式からドーム形へと移行する。

なお埋葬主体部は５号地下式墳同様、東側へ片寄っているが、立石遺構は見られない。

この内部形態は古式の妻入型長方形プランが、形態的に始めて変化をおこした形式で、長方形型最後の様式である５号地下式墳とは区別して「元地原第２形式」としたい。

さらに３号地下式墳では玄室の変化が進み、玄室東側壁の両隅は角張っているが、西側壁は全く円曲化し、羨道も西側に移行して開口し、玄室の西側壁と羨道西側壁が区切りなく連なり、形態的にはＰ字形の内部構造になっている。

また天井部はドーム形式であるが、大棟と軒先を表現する遺構が遺存しているので、切妻

様式の名残りを留めているものと思われる。

その意味では7号地下式墳と類似しているけれども、形態的に異っているので「元地原第3形式」として区分した。

しかし埋葬主体部は5号地下式墳同様、玄室の東側に寄せてあり、しかも立石によって東側壁を囲むように長方形屍床が施されている。この第3形式は2号地下式墳の場合も該当する。

ところで2号地下式墳の場合は3号地下式墳と異なり、天井部に特殊遺構は全く認められず、また玄室内東側立石遺構内の床面には敷石が存在しない。なお3号地下式墳の羨道には閉塞石が納置してあった。

そして、4号地下式墳になると玄室形態もさらに変化を来し、奥壁の方は細くなり、三角形状を呈するP字型形態になっている。

それから天井部もドーム様式と推測されるが、副葬品も玄室中央部に剣が一振納置されているだけであった。それで埋葬主体部も中央部に施されたものと思われる。

この4号地下式墳と極めて類似した内部形態をしているのが6号地下式墳であるが、4号墳と異るところは玄室の東南の隅が角張っていることである。そして埋葬主体部も6号地下式墳の場合は玄室東側に片寄っていた。

この4号・6号の両地下式墳は「元地原第3形式」よりも、さらに変化した形態を呈しているので、これらの様式を「元地原第4形式」と名ずけることにした。

なお、以上の6基の地下式墳の副葬品であるが、全般的に鉄鏃、刀剣などほとんど鉄器類が主な出土品であるが、特徴的なのはすべての地下式墳の主体部に土器が全く副葬されていなかったことである。

最後に、1号地下式墳は、前述してきた長方形プラン系統の6基の墳墓と異なり、平入短形型玄室の形態を呈しているが、内部構造は玄室を囲むように三方の側壁に沿って立石遺構が施してあった。

そしてその玄室内部床面上には平石が敷き詰めてあり、その上に全面的に副葬品が納置してあった。

なお天井部はドーム形式であるが、副葬品は比較的に豊富で、鉄器以外須恵器、土師器なども多量に出土した。この様式を「元地原第5形式」として類別した。

以上、元地原地下式墳の7基について5形式に分類してみたが、それでは次に、この元地原地下式墳墓群の編年について考察してみたいと思う。

この日向地方における地下式墳の編年については過年筆者が地下式墳に関する論考[②]の中で、

3様式に大きく分類し、第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲの様式としたが、さらにその後の論考③において、第Ⅰ様式をA類・B類に分け、さらに第Ⅱ様式もA・Bに類別した。

ところで、初源的な大型の長方形玄室を有する第Ⅰ様式から形態的に変化が起り、玄室の内部構造にもひずみを生じてくる時期を第Ⅰ様式B類にあてた。

しかし、このⅠ－B類にはA類の伝統を踏襲しながら形態の変化が生じてくるが、大型の長方形型地下式墳と2m余の小型長方形地下式墳とは区分し、前者をⅠ－B類－aとし、後者をⅠ－B類－bとして類別してみた。

編年的にはⅠ－A類を5世紀中葉頃に比定し、Ⅰ－B類－aを5世紀後半前葉にあてたいと考えているので、Ⅰ－B類－bは5世紀後半後葉頃に想定したいと思う。

さて、元地原地下式墳墓群の中では、元地原第1形式の5号地下式墳がただ1基だけ、多少ひずみは有しているものの妻入切妻型の長方形玄室を有しているので、類型的にⅠ－B類－bに想定したいと思う。

次に、玄室の短軸に羨道が設けられる系統の長形型の形態であるが、玄室の角隅が変化して丸みをおび、玄室の規模も小型化してくるか、形態的にも玄室の構造がP字型、三角形型を呈するようになってくる。この時期を類別して第Ⅰ様式C類④としたい。

元地原地下式墳墓群では第2形式の7号地下式墳、第3形式の3号・2号の両地下式墳、第4形式の4号・6号の両地下式墳の5基が、このⅠ－C類の様式に比定できる。

元地原では、これらの6基が編年的に形態的な変化を関連づけてたどられるところに特殊性がある。

このⅠ－C類の形式は現在のところ県内でも、ほかにほとんど発見例がなく、わずかに国富町本庄小学校校地内発見の1号⑤・2号面地下式墳が存在するぐらいであるが、いずれにしても、このⅠ－C類の形式は元地原から本庄一帯にかけてのみ進展をみた地下式墳の様式と推測される。

このⅠ－C類の編年であるが、5世紀の末葉前後に推定したい。

それから1号地下式墳であるが、主軸に対して直角の短形型玄室を有する平入り形式をなし、内部の床面上には平石が敷き詰められていたが、玄室床面は三方、壁面に沿って立石で囲まれていた。

この平入り短形型様式としては西都原地下式第3号⑥墳、同9号⑦墳、それに国富町本庄の東ノ原地下式1号⑧墳など、主に西都市、国富町一帯に散見される。

この様式は筆者の編年分類においてⅡ様式B類に比定されるものであるが、その前時期はⅡ様式A類に類別される。それでⅠ－C類の時期とⅡ－A類の時期は、地域は別でも編年的

に重なり合うことも考えられる。

それからこの1号地下式墳の構築年代であるが、6世紀中葉前後の時期と推定される。しかし玄室内部に立石遺構が施してあることを考慮に入れると、Ⅱ－B類でも早い時期に比定されそうである。

以上、元地原地下式墳墓群について論及してきたが、西都原古墳群と本庄古墳群の中間地帯の薩摩原台地の地下式墳墓群、そしてその台地に続く六野原台地には古式地下式墳を含む地下式墳墓群が存在することなど、日向中央内陸部地帯の地下式墳墓群としては注目される地域である。

また地下式墳の始源地域としての西都原古代文化圏内にも立地しており、地下式墳の究明に対して注目される遺跡といえる。

註

① 宮崎県「六野原古墳調査」『宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告』13輯　昭和19.4

② 日高正晴「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』43巻4号　昭和33.3

③ 日高正晴「宮崎県桃木畑地下式A号墳」『古代学研究』64号　1972

④ 日高正晴「地下式墳（地下式横穴）の始源について」『西都原古墳研究所年報』第2号　西都市教育委員会　昭和60.3

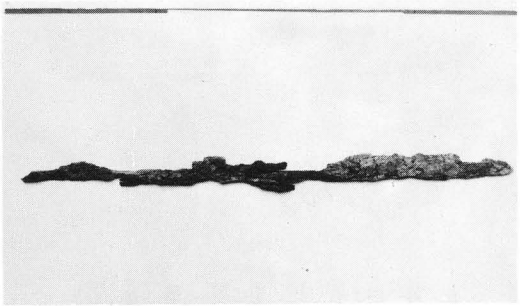
⑤ 野間重孝「本庄小学校内地下式横穴発掘調査報告書」『国富町文化財調査資料』第1集　国富町教育委員会　昭和55.3

⑥ 註②に同じ

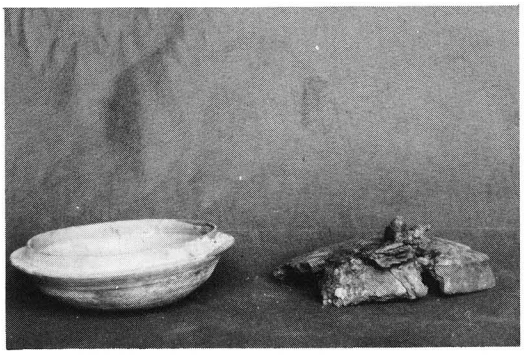
⑦ 日高正晴・茂山護「東立野の地下式9号墳」『宮崎考古』第1号　1975

⑧ 岩永哲夫・田上哲「東ノ原1号地下式横穴墓」『宮崎県文化財調査報告書』第28集　宮崎県教育委員会　昭和60.3

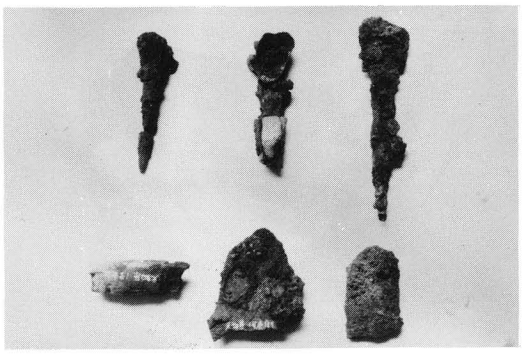
12 ～ 14



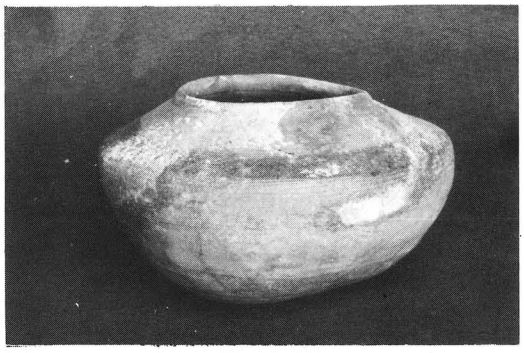
1



15 ～ 16

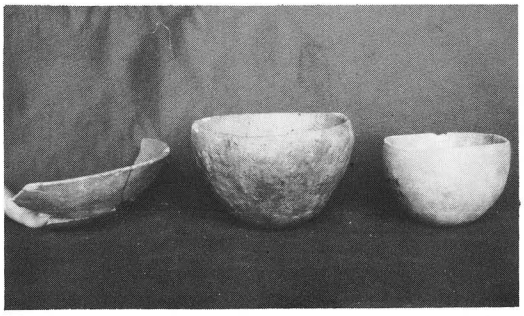


2 ～ 7

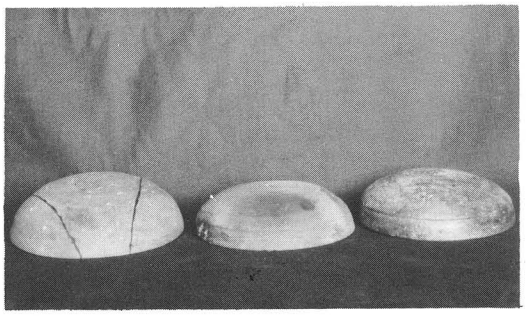


17

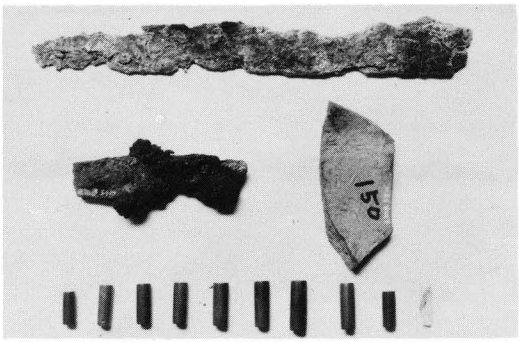
8



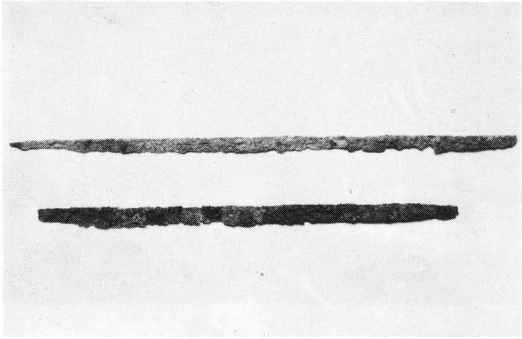
18 ～ 20



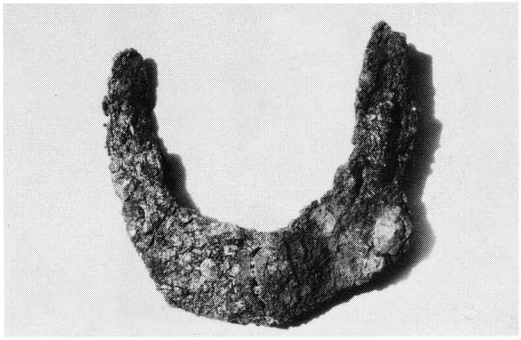
9 ～ 11



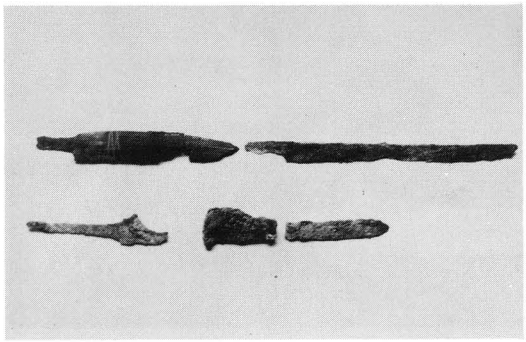
44 ～ 56



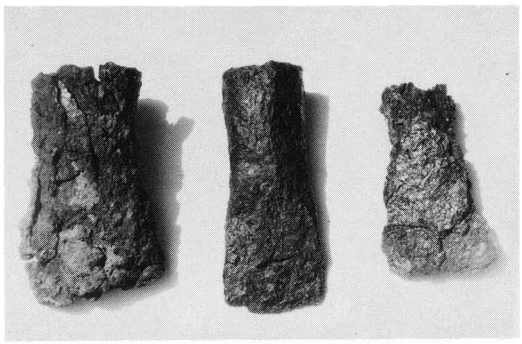
21 ～ 22



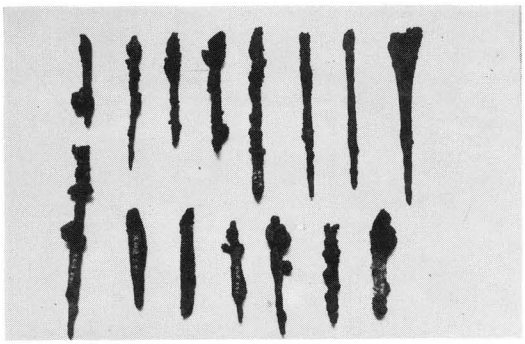
57



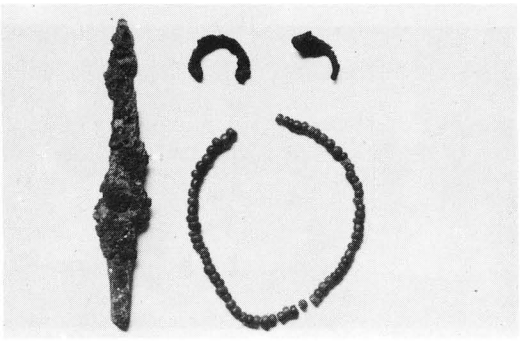
23 ～ 24



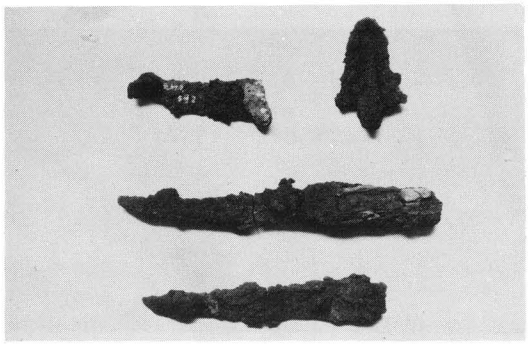
58 ～ 60



25 ～ 39



61 ～ 83



40 ～ 43

西都市・埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

発行年月日　昭和62年3月31日
編　　集　西都原古墳研究所
発　　行　西都市教育委員会
印　　刷　イ マ イ 印 刷